

慈円と道元の「道理」に関する一考察

鶴見大学仏教文化研究所主任 下室 覚道

はじめに

道元禪師（一一〇〇—一二五三、以下道元）が何を重視されているかと言えば、「只管打坐」、「坐禪」である。その上で日常行為を如法に行っていくことが重要である。

しかし、『正法眼蔵』には参究・功夫すべきことが随所に説かれている。⁽¹⁾ 参究・功夫とは、仏の言葉や祖師の公案を静かに、よくよく考え、それによってその底にある「道理」を明らかにすることである。道理は通常隠れており（凡夫には見えない）、参究・功夫によりそれが現成してくるのである。

ところで、道元よりも四五歳年長であるが同時代に生きた天台宗の慈円座主（一一五五—一二三五、以下慈円）がいる。慈円は歴史の中に潜む「道理」を重視した。

最後に、この時代の旧仏教側のもう一人の人物、慈円（一一五五—一二三五）について触れておこう。撰闡家に生まれ、四度も天台座主になった慈円は、まさに体制仏教の象徴的な存在であるが、決して権威に安住していたわけではない。若い頃、遁世の心を抱いて悩んだ慈円は、天台座主として荒れた叡山の復興に力を尽くすとともに、『愚管抄』においては、透徹した目をもって転換期の歴史を見つめ、そこに「道理」の支配を見いだして、新しい時代への橋渡しをなしたのであった。⁽²⁾

慈円晩年に著された『愚管抄』には、歴史の中の「道理」の支配を見出し、その重要性を示している。慈円が天台座

主の地位にあった時、道元は比叡山において修行をされていた。とすれば、「道理」に関して慈円からの影響はなかったのであらうか。あるとすれば、どのような点であらうか。

また、慈円と道元とは共に比叡山に過ごしただけではなく、人間関係、政治的な関係も密接にある。特に、慈円の兄九条兼実（一一四九—一二〇七）は、道元の父とされる源通親（一一四九—一二〇二）の政敵であり、兼実は通親によって失脚させられた。そうすると、慈円にとって道元は敵の子息である。

小堀桂一郎氏は慈円について記した文章の最後に次のように述べている。

凡そ「理に服する」といふことの大切さを人間に教へ、これを鎌倉時代といふ日本の近代の黎明を告げる炬火として掲げたのは、慈円とその言語空間を共有してゐた、明恵、道元、北条泰時といった日本の「道理の世紀」を拓いた人々である。³⁾

ここに「道理の世紀を拓いた」人として明恵、道元、北条泰時の名を挙げている。慈円も道元とともに、「道理」を重視しているが、共通点、或いは相違点はないか。

ところで、生きていると何か不思議な事が起こることがある。何かに動かされているように感じることもある。その背後に何か（道理）があるようにも思える。⁴⁾ それぞれの人生も一つの歴史である。それ故、慈円のように歴史の背後に道理を見出すことに興味を覚える。

まず、慈円の『愚管抄』と道元の『正法眼蔵』並びに『随聞記』の中から「道理」の語句を抽出し、その前後の文章を挙げ、番号を付す。その後、先行業績を踏まえつつ考察を進めたい。

引用に関しては、『愚管抄』の引用は本文を丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店に拠り、訳を大隅和雄和訳『愚管抄全現代語訳』（二〇一二年、講談社）に拠り付した。『正法眼蔵』並びに『随聞記』は春秋社『道元禪師全集』に拠った。『伝光録』も参考として挙げ本文は曹洞宗宗務庁版を用いた。

一 慈円と道元の関係

道元の父と慈円

慈円は、平安時代末期から鎌倉時代初期の天台宗の僧侶であり、『愚管抄』を記したことで知られる。多賀宗集氏は慈円の出身を次のように述べている。

慈円は関白藤原忠通（二〇九七—一一六四）を父とし、女房（侍女）加賀を母として、近衛天皇の久寿二年（一一五五）四月十五日に生まれた。^⑤

父は摂政関白藤原忠通、母は藤原仲光女加賀、摂政関白九条兼実は同母兄にあたる。歌人としても夙に有名で私家集に『拾玉集』がある。『小倉百人一首』では、「おほけなくうき世の民におほふかな わがたつ杣に墨染の袖」の歌で知られる。

それでは、摂関家の出身でありながら何故出家しなくてはならなかったのであろうか。大隈和雄氏は次のように述べている。

慈円は最上層の貴族の子で、父は平安時代末の不安定な宮廷で三七年もの間、摂政・関白の地位を守った法性寺殿藤原忠通でした。慈円の兄のうち三人は順番に摂政・関白となり、一人は太政大臣まで昇進しています。

貴族社会で父の跡を嗣ぐことのできる人数は限られていますから、公家社会に出さない男の子は幼い時に大寺院に入れて、相応の地位と生活の安定を得させるのが、この時代の上層貴族の智恵でした。^⑥

公家社会に出さない男の子は幼い時に大寺院に入れられてしまうが、そこでも相応の地位と生活の安定は約束されていたのである。比叡山山内の重要な役は貴族出身者によって占められ、更にその貴族の師弟は特定の寺院を住房とし

て住み、門跡と称して派閥を作っていたといふ。⁽⁷⁾

摂関九条家の期待を背負って比叡山に入った慈円は、そのしがらみを乗り越えて遁世の意志を通すことはできませんでした。幼い時に父を失った慈円は、同母兄の兼実の期待と厚い支援を受けて、比叡山での地歩を固めようとしていたのですから、兄から遁世を思い止まるよう懇々と説得された時、それに逆らうわけには行きませんでした。⁽⁸⁾

慈円は一時遁世に憧れていたという。これは公家の出身である道元が比叡山を下りたのとは異なる。何故遁世を諦めたかといえば、兄兼実から説得されたからであるという。

西行の遁世に憧れながら、遁世の志を果たせなかった慈円は、方向を転じて世の中のこと、つまり公的な問題に関わるようになりました。慈円の後見人であった兄の兼実が、大きな期待をかけていた子息の良経が若いのに突然死し、落胆の中で兼実も世を去ると、慈円は兼実の孫たち、特に左大臣道家と順徳天皇中宮東一条院立子の後見人として、真剣に九条家の将来を案じました。そして、そのためには天皇や院、天皇を補佐する摂政・関白のあるべき姿を明らかにしなければならないと考えたのです。『愚管抄』はそのために書き上げられた歴史書で、藤原氏を中心にした貴族社会のあり方を捉え、正統的な貴族の立場から現実の政治への批判を書き綴りました。⁽⁹⁾

自己の目指す遁世よりも、同族の繁栄を重要視した。例えば、兼実の孫である九条道家の後見人を務めたり、道家の子である藤原頼経が將軍として鎌倉に下向することに期待を寄せるなど、公武の協調を理想とした。その一環として、『愚管抄』が書かれたのである。後鳥羽上皇の挙兵の動きには西園寺公経とともに反対し、『愚管抄』もそれを諫めるために書かれたとされる。

慈円は天台座主に四度就任した。すなわち、建久三年（一一九二）六十二代、建仁元年（一二〇一）六十五代、建

暦二年（一二二二）六十九代、健保元年（一二二三）七十一代である。

こうした生涯を送った慈円と道元の父とに接点がある。道元の父に関しては、源通親（一一四九—一二〇二）が通説とされるが、古来さまざまな見解が示されている、

中世古祥道氏によれば、道元の父は複数の見解が見出されるという。⁽¹⁰⁾

源通忠 行録（一六二三）

列祖行業記（一六七三）

延宝伝燈録（一七〇六）

本朝高僧伝（一七〇七）

扶桑禅林僧宝伝（一六七五）

忠通 延宝本紀年録（一六七八）

（＊上の通忠の誤刻か）

源通具 名家譜（延宝本紀年録）

源通親 元禄本紀年録（一六八九）

洞上諸祖伝（一六九四）

永平実録（一七一二）

訂補建徳記（一七五四）

右記に記されていない『伝光録』には次のような記述がある。

師諱は道元。俗姓は源氏。村上天皇九代の苗裔。後中書主八世の遺胤なり。

『伝光録』「永平元和尚章」二九三頁

この中、村上天皇とは具平親王（九六四—一〇〇九）であり、後中書王ともいわれる。中世古氏は次のように結論を述べている。

道元禅師の父については、古伝はすべて「村上天皇九代苗裔。後中書王八世遺胤」とするのみで、その名は見えない。この世代を古代のそれに照らすと、徳川時代に強くとられて通説となった源通親尊父説は誤った世代の数え方によるもので、古い時代の数え方からは通具の代になろうし、「育父源垂相上堂」の「育」の当時の用法からしても、禅師の父は源通具であろうと見るほかになく、近年、それに傾く者が多い⁽¹¹⁾。

村上天皇九代の数え方が誤ったため源通親を父とする説が通説になった⁽¹²⁾。通親の息子である源通具（一一七一—一二二七）を父とする説が正しい説であると中世古氏は論じている。

ところで、慈円の兄である九条兼実（一一四九—一二〇七）は源通親とは政敵であり、建久七年（一一九六）に失脚させられた。大隅和雄氏は次のように述べている。

これは鎌倉幕府が成立して以来、九条家が三〇年くらいにわたって基本的な立場としてきた公武協調路線、もう少しそれが進んで公武合体路線というものになっていると言ってもいいと思いますが、そのために最大の努力をする。ところが後鳥羽院の周辺では討幕運動というのでしようか、いずれ承久の乱まで繋がるような動きが起こる、そういう戦乱が起こるだろうということを、慈円は予感していた。そういう方向へ政治を動かそうとした始めの人物が、源通親、土御門通親という公家です。村上源氏ですが、これが兼実の政敵でした。たえず争いを繰り返して、この一派にしてやられると九条兼実は政局の中心から退けられる。慈円も、比叡山の中枢にいられなくなつて、自分の坊へ逼塞するというようなことが繰り返されたのです。通親は、兼実よりも先に亡くなりました⁽¹³⁾。

俗世、政治の争いが比叡山まで影響し、当時天台座主であった慈円は籠居せざるを得なかったのである⁽¹⁴⁾。

源通親は政敵九条兼実一派を廟堂から追放（建久七年の政変）、九八年には為仁の踐祚を実現（土御門天皇）、後鳥羽院庁の別当にも任じて政治の実権を握った。その権勢は世に「源博陸」と称されたほどの全盛時代を築いた。⁽¹⁵⁾ 道元の父が源通親にしろ、源通具にしろ、慈円と道元とは俗世間の家レベルにおいては敵であり、出家の身とはいえ慈円は道元に敵意を抱いていたと推測される。

『愚管抄』には、源通親に関する記述の中に、

コレハ定マレル奇謀ノナラヒナレバ。カクシテ又佛神ノ加護モエアルマジキ時イタリニケレバ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二四八頁

これは陰謀というものの定石であり、このようにして仏神の加護もありえない時代になってしまったので、

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三三二頁
とあって、源通親の所業を陰謀であり仏神の御心に反するような悪しき行いと見なしている。

道元の母と慈円

道元の母に関しても様々な説があるが不明な点が多い。角田泰隆氏は次のように記している。

母については不詳だが、摂関家の識者にして宮中に重んじられた藤原基房の関係の女性ではないかとされる。⁽¹⁶⁾

藤原基房（一一四五—一二三一）の関係の女性と推測されているが、そうすると藤原基房は慈円の異母兄にあたるから、慈円とも接点がある。娘伊子を道元の母とする説もある。

道元養子先の松殿と慈円

『伝光録』には少年時の道元について次のような記している。

時に松殿の禪定閣は、関白摂家職の者なり。天下に並びなし。王臣の師範なり。此人、師を納て猶子とす。家の秘訣を授け、国の要事を教ゆ。十三歳の春。即ち元服せしめて、朝家の要臣となさんとす。師独り人に知られずして。窃に木幡山の荘を出て、叡山の麓に尋ね到る。

『伝光録』「永平元和尚章」二九三—二九四頁

道元は松殿禪定閣によつて養子に招かれ、その山荘にて修学されたと記されている。松殿とは藤原基房である（基房の子師家説もある）。藤原基房は慈円の異母兄にあたる。

道元を叡山に導いた良観と慈円

『伝光録』には次のように記されている。

時に良観法眼と云ふあり。山門の上綱、顕密の先達なり。即ち師の外舅なり。彼の室に到て出家を求む。法眼大に驚て問て曰く、元服の期近し。親父猶父定て暁りあらんか如何。時に師曰く、悲母逝去の時囑して曰く、汝ち出家學道せよと。我も又是の如く思ふ。徒に塵俗に交らんと思はず。但出家せんと願ふ。悲母及び祖母姨母等の恩を報ぜんが爲に出家せんと思ふと。法眼感涙を流して、入室を許す。即ち横川首楞嚴院の般若谷の千光房に留學せしむ。

『伝光録』「永平元和尚章」二九四頁

ひそかに小幡山の山荘を出て比叡山の麓に至つた道元が尋ねたのが外舅（母の兄弟）の良観法眼である（良顕と記す本あり）。良観法眼は松殿基房の子とされるから、そうすると慈円の甥にあたる。

道元得度の師公円と慈円

『伝光録』には次のように記されている。

卒に十四歳、建保元年四月九日、座主公円僧正を礼して剃髪す。同十日延暦寺の戒壇院にして、菩薩戒をうけ、比丘となる。然しより山家の止観を学し、南天の秘教を習ふ。十八歳より、内に一切経を披閲すること一遍。

建保元年（一二二三）四月九日、十四歳の時に道元は天台座主の公円僧正（一一六八—一二三五）について得度し、翌日戒壇院において菩薩戒を受け、比丘となった。

公円僧正は建保元年（一二二三）年四月九日より一月まで天台座主（七〇世）となる。のち法性寺座主となる。嘉禎元年九月二〇日死去。六八歳。慈円との関係は、慈円より灌頂を受けたされる。つまり、慈円の弟子が公円である。

因みに、慈円は治承五年（一一八一年）に九才の親鸞に得度を授けている。慈円の兄、九条兼実は法然の信者であるが、慈円は法然の教義を批判する一方で、その弾圧にも否定的で法然や弟子の親鸞を庇護している。

叡山修業時代の天台座主承円と慈円

先に見たように道元は建保元年（一二二三）四月九日に天台座主の公円僧正について得度した。その後比叡山横川で修行されるが、天台座主は公円の次は慈円、慈円の次は承円である。

承円は治承四年（一一八〇）生まれ。松殿基房の子であり、顕真より受戒。承仁法親王に学び、仙雲より灌頂を受ける。元久二年（一二〇五）天台座主になり、建保二年（一二一四）再任された。第六八世、第七二世天台座主。嘉

禎二年（一二三六）一〇月一六日死去。五七歳で遷化される。

承円が天台座主に再任される頃と道元が比叡山において修行している時期が重なっていると思われる。そして、承円は慈円の兄である松殿基房の子であるとされるから慈円の甥にあたると⁽¹⁷⁾。

道元に栄西を紹介した公胤

『伝光録』には、

後に三井の公胤僧正、同く又外叔なり。時の明匠世に並びなし。因て宗の大事を尋ぬ。公胤僧正示して曰く、吾宗の至極、今汝が疑處なり。傳教慈覺より累代口訣し來る所なり。此疑をして晴さしむべきに非ず。遙に聞く、西天達磨大師東土に來て方に佛印を傳持せしむと。其宗風今天下に布く、名けて禪宗と曰ふ。もし此事を決擇せんと思はゞ、汝建仁寺榮西僧正の室に入て、其故實を尋ね、遙かに道を異朝に訪ふべしと。

『伝光録』永平元和尚章、二九四頁

とあつて、叡山で修行の後、三井寺の公胤僧正（一一三五—一二二六）を訪ねて宗の大事を尋ねた。公胤は建仁寺の栄西僧正に就くよう指示した。

こうした道元の行動は、山門派と寺門派間の争いの他、公円の後七代天台座主に就任した慈円に反発したためであろうか。館隆志氏によれば公胤は、道元と同じ村上源氏系統であるという。

何れにしても公胤が源雅俊の孫であり、村上源氏の出身ということには問題はなからう。村上源氏は、平安時代後期から鎌倉時代の初期に栄華を極めた一族である。ちなみに道元も村上源氏の系統であり、その門弟義尹は、順徳天皇（一一九七—一二四二）の皇子であるが、母方の出自は同じく村上源氏の系統である。⁽¹⁸⁾

叡山にいるよりも、自分と同じ村上源氏系統の公胤を訪ねたのではないか。また、訪ねた時期に火災が起こるなど山

内慌ただしく、公胤が薦めた禅門の栄西に師事したのではないか。⁽¹⁹⁾

二 『愚管抄』における道理

まず、『愚管抄』の道理を見てみるが、『愚管抄』とはいったいどういった特徴がある書物であろうか。大隅和雄氏は次のように述べている。

『愚管抄』という本は、日本人が国の始まりから自分が住んでいる時代までのことを、一人の立場で書いた一番最初の本なのです。⁽²⁰⁾

慈円という個人が一人の立場で国の始まりからの歴史を書いた最初の本であるという。執筆された時期に関しては、現在ではほとんどの人が承久の乱の直前、承久の乱というのは一二二一年に起こったのですが、一二二〇年にはだいたいの書き上げられていたであろうという説に従っています。⁽²¹⁾

とあって、承久の乱が起こる一二二二年頃までには書き上げられたと推測されている。慈円の人生は一一五五年より一二二五年であるから、六五歳頃、慈円晩年の作である。

そして、『愚管抄』は「道理」に関して特に有名である。

『愚管抄』は、『神皇正統記』とともに日本中世の代表的な史書として知られ、史学史の上で歴史の奥にひそむ道理について論じた最初の史書論として重んじられている。⁽²²⁾

倉沢幸久氏も次のように述べている。

この著書は一名「道物理語」とも呼ばれ、「道理」ということで日本のそれまでの歴史をふり返り、これからあるべき方向を示そうとした経世の書である。⁽²³⁾

それでは何故、『愚管抄』は書かれたのであろう。小堀桂一郎氏は次のように述べている。

本書の成立は承久の変の前夜ともいふべき時期（一二二〇年）に、著者の慈円大僧正が時の上皇後鳥羽院に鎌倉幕府打倒のための挙兵といふ企てのあるらしきことを察知し、その暴挙を憂慮し諫止する意図を以ての執筆といふのが定説である。⁽²⁴⁾

『愚管抄』本文には執筆理由を次のように記している。

此皇代年代ノ外ニ神武ヨリ去々年ニ至ルマデ世ノ移行道理ノ一通リヲ書ケリ。是ヲ能々心得テミン人ハ見ラルベキ也。偏ニ仮名ニ書ツクル事ハ是モ道理ヲ思ヒテ書ル也。先是ヲカクカ、ント思ヒ寄事ハ物知レル事ナキ人ノ料也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八五頁

世の中が移り変わっていくその推移の仕方の根本を考え、ここにいる道理の流れとして書いてみた。そのことをよくよく理解して、あとの巻々を読む人は読んでもらいたい。それはもっぱら仮名文字で書いてあるが、それもわたくしが理解した道理に従って書いたからである。というのは、まずこの書をこのように書こうと思ひ立ったのは、物事を知らない人のためであつた。それでは、物事を知らない人たちとはどのような者か。

アヤシノ夫宿直人マデモ。此コトノヤウナルコトグサニテ多事ヲバ心得ル也。是ヲオカシトテカ、ズバ。只眞名ヲコソ用ルベケレ。此道理ドモヲ思ヒ續ケテ。是ハ書付侍リヌル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八五―八六頁。

卑しい人夫や宿直の番人と具体的に記されている。このような方々に対して、仮名文字で書くことによって理解させることができるのである。仮名文字で書くことは当時としては滑稽にうつるが、漢字でかけば読む者が限られてしまう。それ故、仮名文字で書いたのである。慈円にとって全てのの人々に『愚管抄』を読み、道理を考えて欲しいという気持ちを伺うことができる。

1

それでは、『愚管抄』における「道理」の文字が記されている箇所を大隅和雄氏の訳と共に示そう。

一切ノ事ハカクハジメニメデタクアラハシヲカル、ナルベシ。兄ヲコロスハ惡ニニタレドモ。ワガ位ニツカムレウニ射コロシタマウニハアラズ。大方ノアクヲ被対治心也。サテノコリ給アニヲ。又ナヲ位ニツキタマヘトス、メタマウニ。是ヲ思ニタゞ道理ヲ詮トセリ。父王コノ器量ヲハカリテ。第三ノ皇子ヲ東宮ニタテマイケリ。⁽²³⁾

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一四頁

2

すべての世のことわりというものは、このように歴史のはじめにみごとに示しておいてあるらしいということがわかってくる。兄を殺すというのは悪のようであるが、この場合は自分が皇位につこうとして兄を殺されたのではなく、世の常の悪を退治しようという御心からなされたことであつた。それで末弟である東宮は残った兄に位につくようにおすすめになったのである。この経過を見てゆくと、ただ道理を明らかにし、それに従うことが究極の目的とされていることがわかるであろう。父の神武天皇はかねてこうした第三皇子の器量を推察され、東宮に立てておかれたのであつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一三頁

今上

諱懷成。承久三年辛巳四月廿日甲戌受禪。四歳。建保六年十一月廿六日立坊。一歳。十月十日寅時御誕生。母

中宮立子。順徳院太子。

摂政左大臣道家 受禪同日爲摂政。廿九。後京極殿良經嫡男。外祖外舅爲大臣之時。無不居摂政之例。道理必然被戴宣命云々。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八一—八二頁

今上天皇（仲恭天皇）在位三カ月

御名を懷成という。承久三年辛巳四月二十日、甲戌に御年四歳で即位。東宮になられたのは健保六年十一月二十六日、御年一歳の時で、同年十月十日寅の刻（午前四時）の御誕生であつた。母は中宮立子。順徳天皇の御子。

摂政左大臣に道家。天皇即位の日に二十九歳で摂政となる。後京極良経の長男。天皇の母方の祖父あるいは母の兄弟が大臣である時に摂政の任につかない例はない。当然の道理であると先帝の讓位の宣明に書かれていたという。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一〇六頁

此皇代年代ノ外ニ神武ヨリ去々年ニ至ルマデ世ノ移リ行道理ノ一通リヲ書ケリ。是ヲ能々心得テミン人ハ見ラルベキ也。偏ニ仮名ニ書ツクル事ハ是モ道理ヲ思ヒテ書ル也。先是ヲカクカ、ント思ヒ寄事ハ物知レル事ナキ人ノ料也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八五頁

さてわたくしは以上の皇帝年代記のほかに、神武から一昨年（承久元年）までを通観し、世の中が移り変わっていくその推移の仕方の根本を考え、ここにいう道理の流れとして書いてみた。そのことをよくよく理解して、あとの巻々を読む人は読んでもらいたい。それはもっぱら仮名文字で書いてあるが、それもわたくしが理解した道理に従って書いたからである。というのは、まずこの書をこのように書こうと思い立ったのは、物事を知らない人のためであつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一一一頁

アヤシノ夫宿直人マデモ。此コトノヤウナルコトグサニテ多事ヲバ心得ル也。是ヲオカシトテカ、ズバ。只眞名ヲコソ用ルベケレ。此道理ドモヲ思ヒ續ケテ。是ハ書付侍リヌル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八五―八六頁

卑しい人夫や宿直の番人までも、これらのことばのような表現で多くのことを人に伝えまた理解することができるのである。それなのに、こうしたことは滑稽であるといって書く時に使わないとすれば、結局は漢字ばかりを用いることになってしまうであろう。そうすれば漢字の読める人は少ないのであるから、この間の道理を考えた末に、以下のような書き方で書くことにしたのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一一二頁

心アラン人ノ目ヲ留メン時ハ。心ヲ付ル端トナリ。道理ヲワキマフル道ト成ヌベキ事ヲノミ書テ侍ル也。才學メカシキ方ハ是ヨリ心付テ。我今更ニ學問セラルベキ也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八六頁

心ある人が目をとどめる時は、注意をひきつける糸口となり、やがて道理を理解する道になるようなことだけを書いたものである。学問的な方面はそうしたことから興味をおこし、自分であらためて学問をなさるのがよからう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一一三頁

奥ニテカヤウノ物ニハカク書付ル事モアランカシナド思ヒテ。ヒラキヒラキシテ文ヲ見ル程ノ心アルベクモ侍ラヌ世ニテ。今ハ人ノ心無下ニスクナク成ハテ、侍レバ。是モカク書付ル事ヲバ道理哉ト見ナサルベキナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八七頁

書物の巻の終りの部分に、こういう大切なことが書きつけられていることがあるかもしれないなどと思って、書物をくり返しひらいて読むほどの心は、今の世にはあるべくもないのである。今は物の道理を理解する心はひどく少なくなってしまうているので、ここにこんな書き方をしているのも、また道理であろうかと考えていただきたいのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇二二年、講談社、一一三―一一四頁

トシニソヘ日ニソヘテハ。物ノ道理ヲノミオモヒツバケテ。老ノネザメヲモナグサメツ。イトゞ年モカタブキマカルマ、ニハ。世ノ中モヒサシクミテ侍レバ。ムカシヨリウツリマカル道理モアハレニオボエテ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八九頁

年のたつにつけ、日のたつにつけて物の道理ばかりを考えつづけ、年老いてふと目ざめがちな夜半のなぐさめにもしているうちに、いよいよわたしの生涯も終わりに近づこうとしている。世の中を久しい間見てきたのであるから、世の中が昔から移り変わってきた道理というものも、わたくしにはしみじみと思いあわされているのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇二二年、講談社、一一五頁

マコトニイハレテノミオボユルヲ。カクハ人ノヲモハデ。コノ道理ニソムク心ノミアリテ。イトゞ世モミダレ。ヲダシカラヌ事ニテノミ侍レバ。コレヲオモヒツツクルコ、ロヲモ。ヤスメムトオモヒテカキツケ侍ル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八九頁

本来にすべてのことには道理があることがわかってくるのである。ところが世間の人々はそうは考えないで、道理というものに反する心ばかりがあるので、そのためにいよいよ世の中も乱れ、穏やかならぬことばかりになつてしまうのである。この乱世のことを案じてばかりいる自分の心を安らかにしたいと思つて、この書物を書きしるすのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一一五―一一六頁

先コノ次第ヲ思ヒツミクルニ。竝道理ハ十三代成務マデ継躰正道ノマヽニテ。一向國王世ヲ一人シテ輔佐ナクテコトカケザルベシ。仲哀ノ御時。國王御子ナクバ孫子ヲモチイルベシト云道理イデキヌ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、九〇頁

そこでまずここまでの経過を考えてみると、道理そのものがあらわれているのは、十三代の成務天皇までといえよう。そこでは皇位継承が正直のとおりに行われており、国王はただひたすらに一人で世を治め、補佐の臣がなくても何の差支えもなかったのであろう。ところが、仲哀天皇の御代に、国王に御子がない場合には、孫にあたる御子を皇位につけてもよいという道理があらわれた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一一七頁

ムマレサセ給テ後又六十年マデ。皇后ヲ國主ニテヲハシマスベシヤハ。コレハ何事モサダメナキ道理ヲ。ヤウ

ヤウアラハサレケルナルベシ。男女ニヨラズ天性ノ器量ヲサキトスベキ道理。又母ノ后ノヲハシマサンホド。タゞソレニマカセテ御孝養アルベキ道理。コレヲノ道理ヲ末代ノ人ニシラセントテ。カヽル因縁ハ和合スル也。コノ道理ヲ又カクシモサトル人ナシ。次ニ成務ノサキ景行ノ御時。ハジメテ武内ノ大臣ヲオカル。コレ又臣下出クベキ道理也。武内ハ第八ノ孝元天皇ノヤシハ子ナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、九一頁

また御子がお生まれになったのちも、六十年の間、皇后が国主の座におられたというのはどういうことであろうか。このことは、何ごとにもきまりはないという道理を、だんだんと明らかにされたものであろう。つまり、男女の性別よりも天性の才能を第一に考えるべきであるという道理や、母君が御在世の間はすべて母后のおはからいにまかせて、御子は孝行をすべきであるという道理もあるわけで、これらの道理を末の世の人々に理解させるために、天皇がにわかには崩御なさり、才能ある皇后や孝行につとめる御子があらわれるなど、新しい道理をみちびき出すための内的、外的さまざまな原因が集まっているのである。ここに見られる道理というもの、諸関係を理解している人はいない。また成務天皇の一代前である景行天皇の御代に、はじめて大臣がおかれ、武内宿禰が任ぜられた。このこともまたのちに臣下というものができてくる道理をあらわすものである。武内宿禰は第八代孝元天皇の孫の孫にあたる人であった。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一一七頁

其眉輪モ七歳ノ人ナリ。マヽコニテヤノ敵ナレバ道理モアザヤカナリ。

その眉輪王も七歳の若さであり、継子として親の仇を討ったのであるから道理は明白である。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二五頁

又モノ、道リニハ一定軽重ノアルヲ。オモキニツキテカロキヲスルゾト云コトハリト。コノニヲヒシトアラハサレタルニテ侍ルナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、九七―九八頁

つぎに、ものごとの道理というものには、きまつた軽重というものがあつて、重い道理を立てて軽い方を捨てるのだということ。この二つの道理をしつかりと表示したのがこの事件なのであつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二五頁

物ノ道リヲタツルヤウハ。コレガ誠ノ道リニテハ侍ル也。次二世間ノ道リノ軽重ヲタツルニ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、九九頁

物事についてきちんと筋道を立てて説明できるような、その筋道こそが本当の道理というものである。そ

こでつぎに、世間の道理について、その軽重を考えてみたい。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二七頁

コノ王ウセ給ハバ推古女帝ニツキテ。太子執政シテ。佛法王法マモラルベキ道リノ重サガ。ソノ時ニトリテ引ハタラカサルベクモナキ道理ニテアリケルナリ。ソレヲ殺シツルコトハ。コノ馬子大臣ヨキコトヲシツルヨトコソ。世ノ人思ヒケメ。シラズ又推古ノ御氣色モヤマジリタリケントマデ。道リノヲサルナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、九九頁

このような天皇がお亡くなりになれば、推古天皇が即位なさり、聖徳太子が摂政におなりになって、仏法が王法を守るといふ重い道理が、その時の歴史を動かさざるをえない筋道になっていたのであった。そこで馬子大臣が崇峻天皇を殺害したことは、正しいことであつたと世の人も思つたのであろう。確かなことはわからないが、それには推古天皇の御意向も加わつていたであらうと推測することにも、理由があるのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二八頁

コノ佛法ノ方王法ノ方ノ二道ノ道リノカクヒシト行アイヌレバ。太子ハサゾカシトテ物モイハデ。臣下ノサタヲ御覧ジケンニ。コノ道リヲチタチヌレバ。サゾカシニテアリケルヨトユルガズミユルナリ。ソノ筋ニテ。ソノ後佛法ト王法ト中アシキコト露ナシ。カ、レバトテ國王ヲオカサント云心ヲコス人ナシ。事ガラハ又イマイ

マシキ事ナレバ人コレヲサタセズ。モシサタセント思ハバ。コノ道リアザヤカナリニテ侍ケルナルベシト心エヌルナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一〇〇頁

このように仏法の方からと王法の方からと、両法の道理が固くしつかりと一致したので、太子はこれこそあるべきことだと思ひになり、黙って馬子が天皇を殺害したことを見ておいでになった。そうすると、はたしてこの道理に落ち着いたのであるから、仏法と王法との間のあるべき姿があらわされたのであると、確かに理解されるのである。このような筋道のうえのことであるから、そのち仏法と王法との関係がうまく行かないということは露ほどもない。そしてこのような事件があつたからといって、国王を害しようと考えた人もないのである。また、この事件はいまわしいことであるから、人々もその噂をしない。もし、この事件について論じようとすれば、ここに述べたような道理が明白になっていることが理解されるのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二八頁

佛道ヲカクフタギタレバ。ソレヲウチアケテコソヨクリマイラセメトヲボシメシケン道リコソマコトニメデタケレ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一〇〇頁

そうではなくて、仏法がこのように妨害されているので、妨害する者を払いのけてから、御送葬のを行な

おうとお考えになったのであって、その道理はまことに立派なことである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二九頁

大方カウ程ノコトニトガナンドヲコナハレナバ。サハサルコトノアルベキカト。ヨノツネノ因果ノ道リナラン事。道リカナハズ。中中カ、ル國王ハカクナラセ給コソ。道リヤトテアレバコソ。コノ世マデモサタノ外ニテハアル事ナレ。マメヤカノ道リノコレ程キワマラン時ハ。又今モ今モヨロヅハヲソルベキ事也。⁽²⁶⁾

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一〇一頁

だいたいこれほどのことに処罰などを行なったならば、それはそういうことでよかろうと、世間の普通の因果の道理をあてはめて理解されることになってしまい、本当の道理になかった理解ができなくなってしまう。かえって、崇峻天皇のような国王はこのように殺されておしまいになるのが道理であるということなのであるからこそ、今の時代まで問題としてとりあげられなかったのである。真実の道理がこれほどぎりぎりのところまで迫っていくときは、重大な時なのであり、今の世でも万事につけその重大さを深く考えなければならぬのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一二九頁

ソノ中ノ百王ノアイダノ盛衰モ。ソノ心ザシ道理ノユクトコロハ。コノ定ニテ侍ナリ。コレヲ晝夜毎月ニアラ

ハサムトテ。月ノヒカリハカケテハミチ。ミチテハカクルコトニテ侍ナリ。コノ道理ヲヒシトココロウルマヘニハ。一切ノ事ノ證據ハミナカクノミ侍ナリ。盛者必衰會者定離トイフコトハリハコレニテ侍ナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一〇九頁

この巨視的な推移の仲にある天皇百代の間の盛衰というものも、その目ざすところの道理というものは、この大きな流れの理法に従っているのである。これは昼夜・毎月というもので示そうとして、月の光はかけてはみち、みちてはかけることになっているのである。この道理をしつかりと理解したならば、いつさいの物事のやりどころはすべてここにあることがわかるであろう。「盛んなる者はかならず衰え、会う者はかならず別れる」という道理はこのことである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一四一頁

コレハ皆女人母ノ恩ナリ。コレニヨリテ母ヲヤシナイウヤマヒスベキ道リノアラハル、ニテ侍ナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一一〇頁

このように人が生まれ出るのは、すべて女人である母の恩を受けているのである。したがって、ここから、母を敬い孝養をつくさねばならぬという道理が出てくるであらう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一四二頁

コレハミナ王法ヲトロフル上ニ。又ヲコシタツルツギメツギメニ。ヤウカハリテメヅラシクテ。シバシシバシ世ヲサダメラルベキ道リノアラハル、ナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一一一頁

こうしたことはすべて、王法が衰えていく時に、それを立てなおそうとする継目ごとにあらわれる様子の変わっためずらしいやり方であり、そこに少しの間世を治めていく道理が示されているのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一四三頁

眞實ヲコソトヲボシメスズノトヲサル、コトヲ。カクトモマメヤカニコ、ロウル人ナシ。コレヲ返返マコトノ道理ニイレテ。カクコ、ロウベキナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一一八頁

天神が日本国の真実の道理を通そうとお考えになって、物事に筋道を立てられたのに、それを天神の御本意に即して理解する人はいない。そこで、この一連の出来事の意味を真実の道理の中でくり返しくり返し考えて、今ここで述べてきたように理解すべきである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一五二頁

カヤウノ意趣。ヨノタメ人ノタメ。國ノヲトロヘ道理ノトヲラヌコトナレドモ。コノ頼忠三條関白世ニユルサレヨキ人ニテ。小野宮ドノ、子ニテソノ運ノアリケル。カヤウナラデハカナウマジキ因縁ドモノカク和合スルミチハ。コレモ道理ナルカタ待ベキニヤ。サテ三條ノ關白頼忠ハ貞元二年十月十一日ニ關白詔クダリテ。一條院クライニツカセタマヒケルマデ十年歟ヲハシケルホドニ。一條院踐祚ノトキ。ツイ二大入道ドノハサウナキ道理ニテ攝籙ニナラレニケレバ。チカラヲヨバデアリケリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一二六頁

こんな怨恨が横行したことは、世のためにも人のためにも、国が衰えて正しい道理が通らなくなったことを示すものである。しかし、この頼忠三條関白は世に認められた立派な人であり、こうして小野宮殿（実頼）の子に関白となるべき運があつたのは、そういうようにさせずにはおかぬ数々の因縁がより集まつたのであつて、数々の因縁が結合する筋道の中にもまた道理とよぶべきものがあつたのであろう。さて三條関白頼忠は、貞元二年十一月（十月の誤り）十一日に関白の詔が下されてから、一条天皇の御即位まで十年ばかり関白の座においでになつたが、一条天皇の即位とともについに大入道殿（兼家）が文句のない道理によつて摂政におなりになつたので、そののちは何ともいたし方なくしておいでになつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一六三頁

為光。朝光兩大納言ハサハリヲ申テイデニケレバ。濟時コソハナヲ中納言ニテヲコナヒ侍ケレ。コノ濟時ハ大

この摂政の家に天皇の母方の祖父や伯父である大臣があれば、その人がかならずかならず執政の臣となるべきであるという道理がしっかりと嚴重に定められているのであって、そうでなかったことは一度もないである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一六五頁

大入道下ノハコノツギメニト曰ゴロノ遺恨ヲオボシケメドモ。外祖舅ニモアラズ。小野宮下ノ、子九條下ノ、

入道殿ノタメニハハダカラヌ人ニコソ。ソレモ道理ノユクトコロナレバ。ニクカルベキニアラズ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一二七頁

そしてさらに、為光・朝光という二人の大納言も、故障をいいたてて宮中から退出してしまったので、済時だけがそれでも、第四席の大納言としてとり行なったのであった。この済時は大入道殿に対してはまったく遠慮をしない人であったのである。それも道理の通ることなのであるから、済時を憎く思うべきではない。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一六五頁

コノ攝政ノ家ニ帝ノ外祖外舅ナラン大臣ノアランガ。カナラズカナラズ執政ノ臣ナルベキ道理ハヒシトツクリカタメタルダウリニテ。一ドモサナキコトハナシ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一二七頁

子タゞヲナジ事ナレバ。モト宿老ニナリテ關白ナランヲカウベキヤウナシトヲボシメシケルモ道理ニテ。コノ時ハヤミニケルホドニ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一二八頁

大入道殿はこの円融天皇から花山天皇へのつぎ目に、日ごろの恨みを晴らして望みを達したいと思われたのであるが、天皇の祖父でも伯父でもなかった。しかし、小野宮殿の子（頼忠）も、九条殿の子（兼家）も、その点ではまったく同じであつたから、もともと宿老となるべきで、関白になろうとして請うべき法がないとお考へになったのも、道理に合つていて、この時はそのままになつたのであつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一六五―一六六頁

一定カク申サレケルトハキカネドモ。カヤウノコトハ道理キハマリテ。ソノコトバヲツクルコトハ天竺²⁷。唐土ノコトヲコ、ニテクチギ、タル説經師ノ申ニナレバ。カノクニグニノコトバニテハナケンドモ。道理ノセンノタガハヌホドノ事ハ。ゲニゲニトイフヲコソハ正説トハ申スコトナレバ。サコソ申サレケメ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一二九頁

たしかに粟田殿がこう申し上げたとは聞いていないが、出家をすすめるというようなことは、道理のある限りをつくしてそのことばをつくりあげるものであつて、天竺（インド）や唐土で起こったことをこの日本でいう場合、口のうまい説教師（経文の意味をやさしく説き聞かせて民衆を教化する僧）の弁舌にかかると、もとの

国のことばでいうのではないのに、道理の肝心なところさえ間違っていないければ、すべてなるほどまことにそのとおりだと思ってしまうようなのを正しい説だというのであるから栗田殿もきつとそんなふうにして、花山天皇を籠絡したのであらう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一六七頁

サテ世ノスエノ大ナルカハリメハ。後三條院世ノスエニヒトヘニ臣下ノマヽニテ撰録臣世ヲトリテ。内ハ幽玄ノサカイニテヲハシマサム事。末代二人ノ心ヲダシカラズ。脱屣ノ後太上天皇トテ政ヲセヌナラヒハアシキ事ナリトヲボシメシテ。カタガタノ道理サシモヤハヲボシメシケン。委シクハ知ラネドモ。道理ノイタリヨモ歡慮ニノコル事アラジ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一五一頁

世も末になるとそんなことでは人々の心を穏やかに治めることはできないのである。そこで後三条天皇は、退位ののちに太上天皇として政治をとることをしないそれまでの慣行はよくないことだとお考えになった。一方では道理からいってもそうするのが当然とお思いになったのであらう。くわしいことは知るよしもないが、まさか道理というものの至りつくところと、後三条天皇のお考えになったことが、違っていたというようなことはなかったであらう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一九五頁

カギリナクホメヲボシメシテ。隆綱ガ昇進過分ナリト思ヒシハヒガ事ナリケリ。カウホドノ器量ノ者ニテアリケルトコソシラネ。道理ナリケリトコソ仰ラレケレ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一五三頁

天皇はこの裁定文をごらんになって、この上なく感嘆され、「隆綱の早い昇進は過分のことであると思つていたが、誤解であつた。これほどすぐれた人材であるとは知らなかつた。昇進は当然であつてしかるべき道理である」と仰せになつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、一九九頁

只器量ノ淺深。道理ノ輕重ヲコソトヲボシツ、御沙汰ハアル事ナルヲ。スエザマニハ王臣中アシキヤウニノミ近臣愚者モテナシモテナシシツ、世ハカタブキウスルナリ。王臣近臣世ニアラン縉素男女。コレヲヨクヨク心ウベキ也。内々ノスエザマノ人ノ家ヲサマルヤウモタゞ同ジ事ニテ随分随分ニハアル事ゾカシ。サレバケフマデモ大ムネハタガフ事ナシ。ソノ中ノ細々ノ事ハ皆人ノ心ニヨル事ナルヲ。末代ザマハソノ人ノ心ニ物ノ道理ト云モノ、クラクウトクノミナリテ。上ハ下ヲアハレマズ。下ハ上ヲウヤマハネバ。聖徳太子イミジクカキヲカセ給フ十七ノ憲法モカイナシ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一六二―一六三頁

ただ人の人格才能の浅さや深さや、道理の軽重によつて世を治めようとお考えになりながら御処置をおとりになつてゐるのに、末世になると天皇と臣下の仲が悪いようにばかり愚かな近臣が扱つて、世は衰え亡びていくのである。近臣、世にときめいている僧俗男女は、この点をよく心得ておかねばならない。内々に下々の人が家を治める場合にも、その方法はまったく同じことで、人の才能と道理の軽重をもととして、それぞれ分相応の方法があるのである。そのようにしてきたから、今日まで大筋は誤らないできたのである。そして、その大筋の中でいちいちの細かなことはすべて人の心によつてきまることであるのに、末世にはその人の心がものゝ道理というものを理解できなくなり、疎くなるばかりで、上は下をあわれまず、下は上を敬うことをしないのであるから、聖徳太子が立派に書きおかれた『十七条の憲法』も甲斐がない。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、二二一―二二二頁

カヤウノ不覺ヲイミジキ者モシ出ス也。サラニサラニ力ヲヨバヌ事也。トテモカクテモ物ノ道理ノ重キ輕キヲヨクヨク知テ。フルマイタガヘヌホカニハ。ナニモカナフマジキ也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、一九一頁

こういう油断を信西ほどの切れ者もしてしまうことがある。なかなか人間の力の及ばないことである。いずれにしても、物事にそなわっている道理の軽重をよくよくわきまえて、それに違背しないようにふるまることがなしには、何もできないであらう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、二四九頁

抑コノ寶劔ウセハテヌル事コソ。王法ニハ心ウキコトニテ侍レ。是ヲモ心得ベキ道理定メテアルラント案ヲメ
 グラスニ。是ハヒトヘニ今ハ色ニアラハレテ。武士ノ君ノ御マモリトナリタル世ニナレバ。ソレニカヘテウセ
 タルニヤト覺ユル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二三〇頁

そもそも、この宝劔が失われてしまったというこのたびの出来事ほど天皇の政治にとって心の重いことはない
 であろう。そこで、このことについても、理解すべき道理がきつとおこめられているに違いないと思い、考え
 をめぐらすと、今の世の中は武士がひたすら表にあらわれて天皇の守護者となる世の中であるから、それと入
 れ替わつて宝劔がなくなつたのであると思えてくるのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社三〇一頁

大方ハ上下ノ人ノ運命モ三世ノ時運モ。法爾自然ニウツリユク事ナレバ。イミジクカヤウニ思ヒアハスルモイ
 ハレズト思フ人モアルベケレド。三世ニ因果ノ道理ト云物ヲヒシトヲキツレバ。ソノ道理ト法爾ノ時運トノモ
 トヨリヒシトツクリ合セラレテ。流れ下リモエノボル事ニテ侍也。ソレヲ智フカキ人ハコノコトハリノアザヤ
 カナルヲヒシト心ヘツレバ。他心智未來智ナドヲエタランヤウニ。少シモタガハズカネテモ知ラル、也。漢家
 ノ聖人ト云孔子。老子ヨリハジメテ。皆コノ定ニカネテ云アツル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二三一頁

だいたい、上下の人々すべての運命も、過去・現在・未来にわたるめぐり合わせも、理法のままにおのずから移り行くものなのであるから、そのことを理解すればものごとはいへん明確にわかつてくるのである。そんなことは理由のないことだと思ふ人もあろう。しかし、三世にわたる因果の道理というものにしっかりと照らし合わせてみると、その因果の道理と、理法のままに移り行くめぐり合わせとが、本来しっかりと調和するようになられており、その中でものことは流れ下っていったり、また逆行して上っていったりするものであることがわかるであろう。したがって、深い知恵をもつ人は、この理が明白に流れていることをしっかりと理解しているから、他心智（他人の心を知る知恵）・未来智（未来のことを知る知恵）などを得た人のように、すこしも違わずにものごとを予知できるのである。中国の聖人といわれた孔子や老子にはじまるすぐれた人々は、みなこの真理を理解して、前もつてものごとのなりゆきをいい当てたのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三〇一―三〇二頁

大相國〔頼実〕モトノ妻ノ腹ニヲコバエナクテ。女御代トテムスメヲモチタリケルヲ。入内ノ心ザシフカク。又太政大臣ニヲシナサレテ。左大臣ニカヘリナリテ一ノ上シテ。如父經宗ナラバヤト思ヒケリ。サテ卿二位ガ夫ニモヨロコビテ成ニケル程ニ。左大臣ノ事申ケルハ。大臣ノ下登ムゲニメヅラシクアルベキ事ナラズトヲボシメシテ。エ申エザリケレバ。コノ入内ノ事ヲ殿ノムスメ參テ後ハカナフマジ。是マイリテ後ハ殿ノムスメ參ラン事ハ。例モ道理モハバカルマジケレバ。一日コノ本意トゲバヤト。卿二位シテ殿下ニ申ウケリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二五四頁

卿二位の夫大相国（頼実）は先妻（隆子）との間に男の子は生まれなかったが、かつて女御代（幼少の天皇の即位の儀に際して形式的に選ばれる女御）となった娘を持っていた。頼実はその娘を入内させようという強い希望を持ち、また自分の意に反して太政大臣に任ぜられたが、内心ではふたたび左大臣に復任して太政官を統括する実権を握り、父経宗のようになりたいたいものだと思っていた。そんなわけで卿二位の夫にもよることになったのであるが、左大臣にもどりたい旨を申し出たところ、後鳥羽上皇は、大臣の降任ということはその例のないことで、あつてはならないことだというお考えであつたから、申し出を受けていた摂政も上皇にとりつぐことができなかったのである。頼実が思うには、自分の娘（麗子）の入内についても、殿（良経）の娘が入内したあとではもう実現は不可能であろう。自分の娘が入内したのちに、殿の娘が入内するのならば、例もあるし道理にはずれることもなからうというわけで、ある日、この念願をとげたいと思つて、卿二位を通じて殿下（良経）に願いの旨を申し出たのであつた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三三〇—三三一頁

其靈ノ後世菩提マメヤカニタスケトブラフ心シタル人ダニアラバ。今ハカウホドノ事ハヨモアラジカシ。アハレ事ノ道理マコトシク思ヒタル臣下ダニモ二三人世ノ中ニアラバ。スコシハタノモシカリナンモノヲ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二五六—二五七頁

知足院殿の悪霊が来世では仏の救いを得ることができるよう、心から助けなぐさめる人がいさえしたならば、今はこんなことにはとてもならなかったであろう。ああ物ごとの道理を心から思っている臣下さえ二、三

サテ此日本國ノ王臣武士ノナリユク事ハ。事ガラハコノカキツケテ侍ル次第ニテ。皆アラハレマカリヌレド。コレハヨリヨリノ道理ニ思ヒカナヘテ。然モ此ヒガ事ノ世ヲハカリナシツルヨト。其フシヲサトリテ心モツキテ。後ノ人ノ能々ツ、シミテ世ヲ治メ。邪正ノコトハリ善惡ノ道理ヲワキマヘテ。末代ノ道理ニ叶ヒテ。佛神

平家があとかたもなく滅びてしまったその有様、またこの源氏の頼朝將軍が昔も今もめつたにないような器量をもつてしっかりと天下をしずめたのにそのあとのなりゆき、それらを見てくると、それはもう人間のしわざとは考えられないのである。眼に見える世界では、武士の世であるべきだと皇祖の神も定めておいでになることからするならば、今の世のあり方は道理になつた必然のことと考えられる。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三五二頁

人世の中にいたならば、少しは心強いであらうものを。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三三四頁

平氏ノ跡カタネキホロビヤウ。又コノ源氏頼朝將軍昔今有難キ器量ニテ。ヒシト天下ヲシヅメタリツル跡ノ成行ヤウ。人ノシワザトハヨボヘズ。顯ニハ武士ガ世ニテアルベシト。宗廟ノ神モ定メ思食タル事ハ。今ハ道理ニカナイテ必然ナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二七一頁

ノ利生ノウツハ物トナリテ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二八五頁

さて、この日本国の王臣・武士のあり方がしだいに移り行くことは、このように事柄を書きつけてきたような次第で、すべて明白になったのであるが、この書ではその折々の道理に考えを合わせてしかもこんな誤ったところが世を滅ぼそうとして事をたくらんだのだと人々にその節々を理解させ心を行きとどかせて、のちの人がよくつつしんで世を治め、邪と正との道理、善と悪との道理をわきまえて末の世の道理にかなうようにし、仏や神のめぐみをうける器となるようにと書いたのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三六九―三七〇頁

以下7卷（附録）

惣ジテ僧モ俗モ今ノ世ヲ見ルニ。知解ノムゲニウセテ學問ト云コトヲセヌ也。學問ハ僧ノ顯密ヲマナブモ。俗の紀傳明經ヲナラフモ。是ヲ學スルニシタガイテ。知解ニテソノ心ヲウレバコソヲモシロクナリテセラル、事ナレ。スベテ末代ニハ犬ノ星ヲマボルナンド云ヤウナル事ニテエ心ヘヌ也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二八七頁

今の世を見ると、僧侶・俗人の区別なく一般に學問をしなくなり、知恵によって物事を理解する力がいちじるしく低下しているのに気づく。學問というものは、僧侶が顯密の教法を學ぶにしても、俗人が紀傳（紀伝道。『史記』『漢書』などの學習）や明經（明經道。『周易』『論語』などの學習）を學ぶにしても、學ぶにつれ

ソノ中ニ代々ノウツリユク道理ヲバ。心ニウカブバカリハ申ツ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二九〇頁

それにつけても、こんな面白おかしい浅薄なやり方で人の心を誘い出したうえで、正しい道理を理解してほしいと思ひ、わざわざわかりにくい事柄は削除して、その意味だけを伝えようとつとめ、世の中の道理が順次作りかえられながら世の中をささえ、人間を守っているということを申し述べたいというのがこの書の意図なのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三七五頁

て知識と理解力が身につく、学ぼうとするものの意味もよくわかるようになってくるからこそ面白くもなり、精進する気にもなるものである。ところが、世も末になると、人々はすべて物ごとの真の意味を理解することができなくなり、ことわざにある星を見守る犬のようになってしまふのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三七二頁

ソレヲモコノヲカシクアサキ方ニテスカシ出シテ。正意道理ヲワキマヘヨカシト思テ。只一筋ヲワザト耳ドヲキ事ヲバ心詞ニケヅリステ。世中ノ道理ノ次第二ツクリカヘラレテ。世ヲマモリ人ヲモル事ヲ申侍ナルベシ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二八九頁

この中で、道理というものが時代とともに変化していくことを心に浮かぶかぎり述べてみた。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三七六頁

コノヤウニ世ノ道理ノウツリユク事ヲタテムニハ。一切ノ法ハタゞ道理ト云ニ文字ガモツ也。其外ニハナニモナキ也。ヒガゴトノ道理ナルヲシリ。ワカツコトノキハマレル大事ニテアル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二九二―二九三頁

このようにして、世の道理というものが移り変わっていくことを明らかにしようとするならば、すべての存在はただ道理という二文字によってささえられていて、そのほかには何もなかったであろう。間違った悪事もまた道理によってささえられているということを理解し弁別することがしごく大切なことなのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三八〇頁

コノヤウヲ日本國ノ世ノハジメヨリ。次第ニ王臣ノ器量果報ヲトロヘユクニシタガイテ。カヽル道理ヲツクリカヘツクリカヘシテ。世ノ中ハスグル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二九五頁

けつきよく世の中はしだいに落ち衰えていくのである。そうではあるが、内典・外典には、滅罪生善（罪障を滅ぼし善根を生ずること）という道理、遮惡持善（惡を遮斷し善を保持すること）という道理、また諸惡莫作、諸善奉行（もろもろの惡をなすなかれ、もろもろの善を奉行せよということ）という仏の教えが堂々と説かれており、さらにもろもろの仏や菩薩が人々を導くための仮の手段というものがかならず存在するのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三八三頁

コノ國王ノ代々ノ若死ヲセサセ給ニテ。フカク心ウベキ也。高キモ賤シキモ命ノタフルニスギテ。ツクリカタ

こうしたことを考えてみると、日本国のはじめからしだいに王臣の器量と持って生まれた幸運とが衰えていくにつれ、道理というものが作りかえ作りかえされながら、世の中が移り変わり、時が過ぎてきたということがわかるであろう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三八二頁

カナハデカクヲチクダル也。カクハアレド内外典ニ滅罪生善トイフ道理。遮惡持善トイフ道理。諸惡莫作。諸善奉行トイフ佛説ノ。キラキラトシテ。諸佛菩薩ノ利生方便トイフモノ、一定マタルナリ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二九五頁

世の中が移り変わってもものの道理が変化していく次第は、人間には理解しにくいものであるから、そのためにこの書を少しばかり書きつづっているのであるが、これを読む人も、書いてあることを自分の心の中に入れて、自分でよく考えてみることをしなければ、道理の推移というものを決して理解することはできないであろう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三九七頁

メタル道理ヲアラハス道ハアルマジキ也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、三〇〇頁

このように代々の国王が若死をなさっていることは、その意味をよく考えてみる必要がある。高貴の人でも下賤の者も、運命によって定められた寿命以上に、命を長くするような道理をつくりかため、それを実現する手だてを持っているはずがない。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、三八九頁

スコシハ世ノウツリ物ノ道リノカハリユクヤウハ。人コレヲワキマヘガタケレバ。そのレウニコレハカキツケ侍レド。コレヲミム人モワガ心ニイレイレセンズレバ。サラニカナフマジ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、三〇六頁

ソレモイハレタレド。我身ニアラタナルタ、リハナケレドモ。イカニモノ、ハカライハ。コレホドノヤウヲフ
カク思ヒトカヌ所ニ事ハイデクル也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、三〇八―三〇九頁

それをもつともなことではあるが、御自身にあらたかな崇りはなかったとしても、ともかく物ごとの処置をするには、これほどまでにさまざまなことを深く考えて理解することが必要なものであり、それをしないことから、いろいろな事件が起こってくるのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、四〇〇頁

法門ノ十如是ノ中ニモ。如是本末究竟等ト申コト也。カナラズ昔今ハカヘリアイテ。ヤウハ昔イマナレバカハ
ルヤウナレドモ。同スズニカヘリテモタフル事ニテ侍也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、三一五頁

仏教で説く十如是（万象がそのまま真理であることを十の方面から説いたもの）の中にも、如是本末究竟等（本をなすもののあり方から、そのはたらきによってあらわれる末の報いまで、それらの帰することはけっきよく同一で真理そのものであるということ）という教えがあるが、過去と現在とはかならず呼応しあっており、外見は昔と今では変わっているようでも、同じ一つの筋道でささえられているのである。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、四〇八―四〇九頁

君ハ臣ヲタテ。臣ハ君ヲタツルコトハリノヒシトアルゾカシ。コノコトハリヲコノ日本國ヲ昔ヨリサダメタルヤウト。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、二八五頁

君は臣を立て、臣は君を立てて世を治めていくという道理がしつかりと存在している。日本国では、この道理を昔から定められたあり方であるとしてきたのであつて、

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、四一〇頁

ソレヲバ一向ニ事ニノゾミテ。道理ニヨリテ万ノ事ノヲコナハルベキ也。一向ニ天道ニ任セマイラセテ。无道ニヲオコナハゞ冥罰ヲマタルベキ也。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、三一九頁

しかし、そのような人に対しても、事にのぞまれればひたすらに道理によつて万事を処理なさるべきである。すべてをひたすらに天地の主宰神におまかせになつて、文武兼行の撰録の臣が道理にはずれたことを行えば、神々の眼に見えない罰が下されるであらう。

慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、四一三頁

三 『正法眼蔵』における道理

次に、道元の『正法眼蔵』における道理を示す。引用は春秋社本『道元禪師全集』を用い、その巻名及び巻数頁数のみを記した。

1 人、舟にのりてゆくに、目をめぐらしてきしをみれば、きしのうつるとあやまる。目をしたしく舟につくれば、舟のすすむをしがごとく、身心を乱想して万法を辨肯するには、自心自性は常住なるかとあやまる。もし行李をしたしくして箇裡に帰すれば、万法のわれにあらぬ道理あきらけし。

「現成公案」(一巻三頁)

2 師云く、なんちただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらざといふことなき道理をしらず、と。僧曰く、いかならんかこれ無処不周底の道理。ときに、師、あふぎをつかふのみなり。

「現成公案」(一巻六頁)

3 おほよそ仏性の道理、あきらむる先達すくなし。諸阿菟摩教および経論師のしるべきにあらず。仏祖の児孫のみ単伝するなり。仏性の道理は、仏性は成仏よりさきに具足せるにあらず、成仏よりのちに具足するなり。仏性かならず成仏と同参するなり。この道理よくよく参究功夫すべし、三二十年も功夫参学すべし。十聖三賢のあきらむるところにあらず。衆生有仏性、衆生無仏性と道取する、この道理なり。成仏已来に具足する法なり

と参学する、正的ななり。かくのごとく学せざるは、仏法にあらざるべし。かくのごとく学せずば、仏法あへて今日にいたるべからず。もしこの道理あきらめざるには、成仏をあきらめず、見聞せざるなり。

「仏性」(一巻三頁)

風火未散、といふ言語、しづかに功夫すべし。未散、といふは、いかなる道理がある。風火のあつまれりけるが、散すべき期いまだしきと道取するに、未散といふか、しかあるべからざるなり。風火未散は、ほとけ、法をとく。未散風火は、法、ほとけをとく。たとへば、一音の法をとく時節到来なり。説法の一音なる、到来の時節なり。法は一音なり、一音の法なるゆえに。

「仏性」(一巻四三頁)

仏道を説著するに、胎生化生等は仏道の行履なるといへども、いまだ湿生卵生等を道取せず。いはんやこの胎卵湿化生のほかに、なほ生あること、夢也未見在なり。いかにいはんや胎卵湿化生のほかに、胎卵湿化生あることを見聞覚知せんや。いま仏仏祖祖の大道には、胎卵湿化生のほかの胎卵湿化生あること、不曾蔵に正伝せり、親密に正伝せり。この道得、きかず・ならはず・しらず・あきらめざらんは、なにの儼類なりとかせん。すでに四生はきくところなり、死はいくばくかある。四生には四死あるべきか、又、三死二死あるべきか、又、五死六死、千死万死あるべきか。この道理、わづかに疑著せんも、参学の分なり。しばらく功夫すべし、この四生衆類のなかに、生はありて死なきものあるべしや。又、死のみ単伝にして、生を単伝せざるありや。単生単死の類の有無、かならず参学すべし。わづかに無生の言句をききてあきらむる

6

ことなく、身心の功夫をさしおくがごとくするものあり。これ愚鈍のはなはだしきなり。信・法・頓・漸の論にもおよばざる畜類といひぬべし。ゆえいかなとなれば、たとひ無生ときくといふとも、この道得の意旨作麼生なるべし。さらに無仏・無道・無心・無滅なるべしや、無無生なるべしや、無法界・無法性なる

「行仏威儀」(二卷六四頁)

しばらく雪峰のいふ三世諸仏、在火焰裡、転大法輪といふ、この道理ならふべし。三世諸仏の転法輪の道場は、かならず火焰裡なるべし。火焰裡かならず仏道場なるべし。経師・論師きくべからず、外道・二乗するべからず。しるべし、諸仏の火焰は諸類の火焰なるべからず。又、諸類は火焰あるかなきかとも照顧すべし。三世諸仏の在火焰裡の化儀、ならふべし。

「行仏威儀」(二卷七〇頁)

7

徳山もし丈夫なりせば、婆子を勘破するちからあらまし。すでに勘破せましかば、婆子まことにその人なる道理もあらはるべし。徳山いまだ徳山ならざれば、婆子その人なることもいまだあらはれず。

「心不可得」(二卷八四頁)

8

南岳いはく、磨作鏡。

この道旨、あきらむべし。磨作鏡は、道理かならずあり、見成の公案あり、虚設なるべからず。埤はたとひ

塙なりとも、鏡はたとひ鏡なりとも、磨の道理を力究するに、許多の榜样あることをしるべし。古鏡も明鏡も、磨塙より作鏡をうるなるべし。もし諸鏡は磨塙よりきたるとしらざれば、仏祖の道得なし、仏祖の開口なし、仏祖の出息を見聞せず。

大寂いはく、磨塙豈得成鏡耶。

まことに磨塙の鉄漢なる、他の力量をからざれども、磨塙は成鏡にあらず。成鏡たとひ漚耳なりとも、すみやかなるべし。

南岳いはく、坐禪豈得作仏耶。

あきらかにしりぬ、坐禪の、作仏をまつにあらざる道理あり、作仏の、坐禪にかかはれざる宗旨かくれず。大寂いはく、如何即是。

いまの道取、ひとすちに這頭の問著に相似せりといへども、那頭の即是をも問著するなり。たとへば、親友の、親友に相見する時節をしるべし。われに親友なるは、かれに親友なり。如何・即是、すなはち一時の出現なり。

「坐禪箴」(一卷一〇七—一〇八頁)

若執坐相、非達其理。

いはゆる執坐相とは、坐相を捨し、坐相を触するなり。この道理は、すでに坐仏するには、不執坐相なることとえざるなり。不執坐相なることとえざるがゆえに、執坐相はたとひ玲瓏なりとも、非達其理なるべし。恁麼の功夫を脱落身心といふ。いまだかつて坐せざるものに、この道のあるにあらず。「坐禪箴」(一卷一一〇頁)

10

いはゆる、一盲引衆盲なり。一盲引衆盲の道理は、さらに一盲引一盲なり、衆盲引衆盲。衆盲引衆盲なるとき、包含万有包含于包含万有なり。さらにいく大道にも万有にあらざる、いまだその功夫現成せず、海印三昧なり。

〔海印三昧〕（二卷一二六頁）

11

あはれむべし、かくのごとくのやから、如来道の空華の時節・始終をしらず。諸仏道の翳眼空華の道理、いまだ凡夫・外道の所見にあらざるなり。諸仏如来、この空華を修行して、衣座室をうるなり、得道・得果するなり。

〔空華〕（二卷一二九頁）

12

眼翳によりて空華ありとのみ覺了して、空華によりて眼翳あらしむる道理を覺了せざるなり。

しるべし、仏道の翳人といふは、本覺人なり、妙覺人なり、諸仏人なり、三界人なり、仏向上人なり。おろかに翳を妄法なりとして、このほかに眞法ありと学することなかれ。しかあらんは、小量の見なり。翳華もし妄法ならんは、これを妄法と邪執する能作・所作、みな妄法なるべし。ともに妄法ならんがときは、道理の成立すべきなし。成立する道理なくば、翳華の妄法なること、しかあるべからざるなり。悟の翳なるには、悟の衆法、ともに翳莊嚴の法なり。

〔空華〕（二卷一三〇—一三一頁）

13

唐憲宗皇帝は、穆宗・宣宗兩皇帝の帝父なり。敬宗・文宗・武宗三皇帝の祖父なり。仏舍利を拝請して、入内

供養のちなみ、夜放光明あり。皇帝大悦し、早朝の群臣、みな賀表をたてまつるにいはく、陛下の聖徳・聖感なり。ときに一臣あり、韓愈文公なり、字は退之といふ。かつて仏祖の席末に参学しきたれり。文公ひとり賀表せず。憲宗皇帝宣問す、群臣みな賀表をたてまつる、卿なんぞ賀表せざる。文公奏対す、微臣かつて仏書を見るにいはく、仏光は青黄赤白にあらず、いまのはこれ龍神衛護の光明なり。皇帝宣問す、いかにあらんかこれ仏光なる。文公無対なり。

いまこの文公、これ在家の士俗なりといへども、丈夫の志気あり、回天転地の材といひぬべし。かくのごとく参学せん、学道の初心なり。不如是学は、非道なり。たとひ講経して天花をふらすとも、いまだこの道理にいたらずば、いたづらの功夫なり。たとひ十聖三賢なりとも、文公と同口の長舌を保任せんとき、発心なり、修証なり。

「光明」(一巻一四一頁)

正法、よに流布せざらんときは、身命を正法のために抛捨せんことをねがふとも、あふべからず。正法にあふ今日のわれらを、ねがふべし、正法にあふて身命をすてざるわれらを、慚愧せん。はつべくは、この道理をはつべきなり。しかあれば、祖師の大神を報謝せんことは、一日の行持なり。自己の身命をかへりみることなれ。禽獸よりもおろかなる恩愛、おしむですてざることなかれ。

「行持下」(一巻一七九頁)

古昔よりいひきたり、西天よりいひきたり、天上よりいひきたれる道あり。いはゆる、若因地倒、還因地起、離地求起、終無其理。

しかあれば、明鏡の明と、古鏡の古と、同なりとやせん、異なりとやせん。明鏡に、古の道理ありやなしや、古鏡に、明の道理ありやなしや。古鏡といふ言によりて、明なるべし、と学することなかれ。宗旨は、吾亦如

参学するべし、智を説著するは、いまだ仏道の究竟説にあらざるなり。すでに諸仏大円鑑、たとひわれと同生せりと見聞すといふとも、さらに道理あり。いはゆるこの大円鑑、この生に接すべからず、他生に接すべからず。玉鏡にあらず、銅鏡にあらず、肉鏡にあらず、髓鏡にあらず。円鑑の言偈なるか、童子の説偈なるか。

「古鏡」(一卷二三頁)

いはゆる道は、地によりてたふるるものは、かならず地によりておく、地によらずしておきんことをもとむるは、さらにうべからず、となり。しかあるを挙拈して、大悟をうるはしとし、身心をもぬくる道とせり。このゆえに、もし、いかなるか諸仏成道の道理なる、と問著するにも、地にたふるるものの、地によりておくがごとし、といふ。これを参究して、向來をも透脱すべし、末上をも透脱すべし、正当恁麼時をも透脱すべし。大悟・不悟、却迷・失迷、被悟礙・被迷礙、ともにこれ地にたふるるものの、地によりておくる道理なり。これ天上・天下の道得なり、西天・東地の道得なり。古往・今來の道得なり、古仏・新仏の道得なり。この道得、さらに道未盡あらず、道虧闕あらざるなり。

しかあれども、恁麼会のみにして、さらに不恁麼会なきは、このことばを参究せざるがごとし。たとひ古仏の道得は恁麼つたはれりといふとも、さらに古仏として古仏の道を聞著せんとき、向上の聞著あるべし。いまだ西天に道取せず、天上に道取せずといへども、さらに道著の道理あるなり。

「恁麼」(一卷二〇五頁)

是あり、汝亦如是あり。西天諸祖亦如是の道理、はやく練磨すべし。祖師の道得に、古鏡は磨あり、と道取す。明鏡もしかあるべきか、いかん。まさにひろく諸仏諸祖の道にわたる参考あるべし。

雪峰道の胡漢俱隱は、胡も漢も、明鏡時は俱隱なり、となり。この俱隱の道理、いかにいふぞ。胡・漢すでに来現すること、古鏡は相呈礙せざるに、なにとしてかいま俱隱なる。古鏡は、たとひ胡来胡現、漢来漢現なりとも、明鏡来は、おのづから明鏡来なるがゆえに、古鏡現の胡・漢は、俱隱なるなり。しかあれば、雪峰道にも古鏡一面あり、明鏡一面あるなり。正当明鏡来のとき、古鏡現の胡漢を呈礙すべからざる道理、あきらめ決定すべし。

「古鏡」(一卷二三〇頁)

いまは話頭なる道理現成するなり。たとへば、話頭も大地有情同時成道したるか、さらに再全の錦にはあらざるなり。

「古鏡」(一卷二三三頁)

および修行・成道もかくのごとし。われを排列してわれこれを見るなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。

恁麼の道理なるゆえに、尽地に万象・百草あり、一草・一象おのおの尽地にあることを参考すべし。かくのごとくの往来は、修行の発足なり。到恁麼の田地のとき、すなはち一草・一象なり、会象・不会象なり、会草・不会草なり。正当恁麼時のみなるがゆえに、有時みな尽時なり、有草・有象ともに時なり。時時の時に尽有・尽界あるなり。しばらく、いまの時にもれたる尽有・尽界ありや、なしや、と観想すべし。しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節に、あらゆる見解は、有時のことばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂

圓悟禪師克勤和尚云、生也全機現、死也全機現。
この道取、あきらめ参究すべし。参究すといふは、生也全機現の道理、はじめ・おはりにかかはれず、尽大地・尽虚空なりといへども、生也全機現をあひ罣礙せざるのみにあらず、死也全機現をも罣礙せざるなり。

「全機」(一卷二六〇頁)

釈迦牟尼仏の、釈迦牟尼仏に授記したるなり。授記の未合なるには、授記せざる道理なるべし。その宗旨は、すでに授記あるに授記するに罣礙なし、授記なきに授記するに剰法せざる道理なり。虧闕なく、剰法にあらずる、これ諸仏祖の、諸仏祖に授記したる道理なり。

「授記」(一卷二五〇頁)

となれりき、あるときは丈六八尺となれりき、たとへば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなり、と。いまは、その山河たとひあるらめども、われすぎきたりて、いまは玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地となり、とおもふ。

しかあれども、道理この一條のみにあらず。いはゆる、山をのぼり、河をわたりし時に、われありき、われに時あるべし。われすでにあり、時、さるべからず。時、もし去來の相にあらずば、上山の時は有時の而今なり。

「有時」(一卷二四一—二四二頁)

這竿得恁麼長なり、那竿得恁麼短なり。これみな画図なるがゆえに、長短の図、かならず相符するなり。長画あれば、短画なきにあらず。この道理、あきらかに参究すべし。

「画餅」(一卷二七三頁)

23

あはれむべし、なんぢが深愛する名利は、祖師これを糞穢よりもいとふなり。かくのごとく道理、仏法の力量の究竟せざるにはあらず、良人をほゆるいぬありとするべし。ほゆるいぬをわづらふことなかれ、うらむることなかれ。

「谿声山色」(一卷二八一頁)

24

しるべし、この道理は、拳山市地両知己、玉石全身百雜碎なり。枯木禪師の示衆、しづかに参究功夫すべし、卒爾にすることなかれ。

「仏向上事」(一卷二八九頁)

25

いま師資の道、かならず審細にすべし。いはゆる向上不名道膺は、道膺の向上なり。適来の道膺に、向上の不名道膺あることを参学すべし。向上不名道膺の道理現成するよりこのかた、真箇道膺なり。

「仏向上事」(一卷二九〇頁)

26

諸仏身金色、百福相莊嚴、といふ、好夢は諸仏身なりといふこと、直至如今更不疑なり。覚中に仏化やまざる道理ありといへども、仏祖現成の道理、かならず夢作夢中なり。莫謗仏法の参学すべし。莫謗法の参学すると

き、而今の如来道、たちまちに現成するなり。

「夢中説夢」(一卷三〇一頁)

27

仏法の道理いまだゆめにもみざらんは、たとひ百歳なる老比丘なりとも、得法の男女におよぶべきにあらず。うやまふべからず、ただ賓主の礼のみなり。仏法を修行し、仏法を道取せんは、たとひ七歳の女流なりとも、すなはち四衆の導師なり、衆生の慈父なり。

「礼拝得髓」(一卷三〇八頁)

28

律云、男二所、女三所、おなじくこれ波羅夷不共住。

しかあれば、姪所対の境になりぬべしとてきはば、一切の男子と女人と、たがひにあひきらうて、更に得度の期あるべからず。この道理、子細に檢点すべし

「礼拝得髓」(一卷三一〇頁)

29

石女夜生児は、石女の生児するときを夜といふ。おほよそ、男石・女石あり、非男女石(男女に非ざる石)あり。これよく天を補し、地を補す。天石あり、地石あり。俗のいふところなりといへども、人のしるところまれなるなり。生児の道理しるべし。生児のときは、親子並化するか。児の親となるを、生児現成と参学するのみならんや、親の児となるときを、生児現成の修証なり、と参学すべし、究徹すべし。

「山水経」(一卷三一九頁)

世界に水ありといふのみにあらず、水界に世界あり、水中の、かくのごとくあるのみにあらず、雲中にも有情世界あり、風中にも有情世界あり、火中にも有情世界あり、地中にも有情世界あり、法界中にも有情世界あり、一茎草中にも有情世界あり、一拄杖中にも有情世界あり。有情世界あるかごときは、そのところ、かならず仏祖世界あり。かくのごとくの道理、よくよく参学すべし。

「山水経」(二卷三七頁)

これ七仏祖宗の通誠として、前仏より後仏に正伝す、後仏は前仏に相嗣せり。ただ七仏のみにあらず、是諸仏教なり。この道理を功夫参究すべし。いはゆる、七仏の法道、かならず七仏の法道のごとし。相伝相嗣、なほ箇裏の通消息なり。すでに是諸仏教なり、百千万仏の教・行・証なり。

「諸惡莫作」(一卷三四三頁)

いはゆる諸仏、あるひは自在天のごとし。自在天に同・不同なりといへども、一切の自在天は諸仏にあらず。あるひは転輪王のごとくなり。しかあれども、一切の転輪聖王の、諸仏なるにあらず。かくのごとくの道理、功夫参学すべし。

「諸惡莫作」(一卷三四九頁)

まさに糞掃と称すべし。糞掃なるがゆえに、糞掃にして絹にあらず、布にあらざるなり。たとひ人天の、糞掃と生長せるありとも、有情といふべからず、糞掃なるべし。たとひ松・菊の、糞掃となれるありとも、非情といふべからず、糞掃なるべし。糞掃の、絹・布にあらず、珠玉をはなれたる道理をしるとき、糞掃衣は現成す

34

るなり。糞掃衣にはむまれあふなり。絹・布の見、いまだ零落せざるは、いまだ糞掃を夢也未見なり。たとひ鹿布を袈裟として一生受持すとも、布見をおぼえらんは、仏衣正伝にあらざるなり。

「伝衣」 (一卷三六六—三六七頁)

また商那和修の衣は、在家の時は俗服なり、出家すれば袈裟となる。この道理、しづかに思量功夫すべし。見聞せざるがごとくしてさしおくべきにあらず。いはんや仏仏祖祖正伝しきたれる宗旨あり。文字かぞふるたぐひ、覚知すべからず、測量すべからず。まことに仏道の千変万化、いかでか庸流の境界ならん。三昧あり、陀羅尼あり。算沙のともがら、衣裏の宝珠をみるべからず。

「伝衣」 (一卷三六八頁)

35

あるときはいく、神通并妙用、運水及搬柴。この道理、よくよく参究すべし。

「神通」 (一卷三九五頁)

36

古云、声聞経中、称阿羅漢、名為仏地。

いまの道著、これ仏道の証明なり。論師、胸臆の説のみにあらず、仏道の通軌あり。阿羅漢を称して仏地とする道理をも参学すべし、仏地を称して阿羅漢とする道理をも参学すべきなり。

「阿羅漢」 (一卷四〇五頁)

渤潭湛堂文準禪師云、熱時熱殺寒時寒、寒暑由來總不干、行尽天涯諳世事、老君頭戴猪皮冠。
しばらくとふべし、作麼生ならんかこれ不干底道理、速道速道。

「春秋」(一巻四一四頁)

達磨すでに伝与するときは達磨なり、二祖すでに得髓するには達磨なり。この道理の参究によりて、仏法なほ今日にいたるまで仏法なり。もしかくのごとくならざらんは、仏法の今日にいたるにあらず。この道理、しづかに功夫参究して、自道取すべし、教他道取すべし。

「葛藤」(一巻四二二頁)

仏の印証をうるとき、無師独悟するなり、無自独悟するなり。このゆえに、仏仏証嗣し、祖祖証契すといふなり。この道理の宗旨は、仏仏にあらざれば、あきらむべきにあらず、いはんや十地・等覺の所量ならんや、いかにいはんや経師・論師等の測度するところならんや。

「嗣書」(一巻四二三頁)

この道理、あきらかに仏祖正嗣の宗旨なり。

「嗣書」(一巻四二四頁)

さらに、迦葉仏は釈迦牟尼仏に嗣法する、と参究する道理あり。この道理をしらざるには、仏道をあきらめず、仏道をあきらめざれば、仏嗣にあらず。仏嗣といふことは、仏子といふことなり。

「嗣書」(一巻四二五頁)

先師古仏天童堂上大和尚、しめしていはく、諸仏かならず嗣法あり、いはゆる、釈迦牟尼仏者、迦葉仏に嗣法す、迦葉仏者、拘那含牟尼仏に嗣法す、拘那含牟尼仏者、拘留孫仏に嗣法するなり。かくのごとく仏仏相嗣して、いまにいたると信受すべし。これ学仏道なり。

ときに道元まうす、迦葉仏入涅槃ののち、釈迦牟尼仏は始めて出世成道せり。いはんやまた賢劫の諸仏、いかにしてか莊嚴劫の諸仏に嗣法せん、この道理いかん。

先師いはく、なんぢがいふところは、聴教の解なり、十聖三賢等の道なり、仏祖嫡嫡の道にあらず。わが仏伝の道は、しかあらず。釈迦牟尼仏、まさしく迦葉仏に嗣法せり、とならひきたるなり。釈迦仏の、嗣法してのちに、迦葉仏は入涅槃すと参学するなり。釈迦仏、もし迦葉仏に嗣法せざらんには、天然外道とおなじかるべし、誰か釈迦仏を信ずるあらん。かくのごとく仏仏相嗣して、いまにおよびきたれるによりて、箇箇仏ともに正嗣なり。

「嗣書」(一巻四三四—四三五頁)

ほよそ仏伝のあらゆる功德は、ことごとくこれ説心説性なり。平常の説心説性あり、牆壁瓦礫の説心説性

あり。いはゆる、心生種種法生の道理現成し、心滅種種法滅の道理現成する、しかしながら心の説なる時節なり、性の説なる時節なり。

「説心説性」(二卷四五〇頁)

しかあれば、説心説性は、仏道の正直なり。杲公、この道理に達せず、説心説性すべからず、といふ、仏法の道理にあらず。

「説心説性」(二卷四五三頁)

しかあれば、仏道の功德・要機、もらさずそなはれり。西天より東地につたはれて十万八千里なり、在世より今日につたはれて二千余載、この道理を参学せざるともがら、みだりにあやまりていはく、仏祖正伝の正法眼蔵涅槃妙心、みだりにこれを禪宗と称す、祖師を禪祖と称す、学者を禪師と号す、あるひは禪和子と称し、あるひは禪家流の自称あり。これみな僻見を根本とせる枝葉なり。

「仏道」(二卷四七二頁)

法兄法弟におよぼし、一列せしむべからず。まさに明窓下安排なり。臨濟・三聖の因縁は仏祖なり。今日臨濟の附嘱は、昔日靈山の附嘱なり。しかあれば、臨濟宗と称すべからざる道理、あきらけし。

「仏道」(二卷四八三頁)

かくのごとくの道理、しづかに思惟すべし、卒爾にすることなかれ。

「仏経」(二卷二五頁)

仏道の面授かくのごとくなる道理を、かつて見聞せず、参学なきともがあるなかに、大宋国仁宗皇帝の御宇、景祐年中に、薦福寺の承古禪師といふものあり。

上堂云、雲門匡真大師、如今現在、諸人還見麼。若也見得、便是山僧同参、見麼見麼。此事直須諦当始得、不可自謾。且如往古黄檗、聞百丈和尚拳馬大師下喝因縁、他因大省。百丈問、子向後莫承嗣大師否。黄檗云、某雖識大師、要且不見大師。若承嗣大師、恐喪我兒孫。大衆、當時馬大師遷化、未得五年、黄檗自言不見。当知、黄檗見処不円。要且祇具一隻眼。山僧即不然、識得雲門大師、亦見得雲門大師、方可承嗣雲門大師。祇如雲門、入滅已得一百余年。如今作麼生説箇親見底道理、会麼。通人達士、方可証明。眇劣之徒、心生疑謗。見得不在言之。未見者、如今看取不。請久立珍重。

「面授」(二卷六〇頁)

審細にすべし、倉卒にすべからず。いそぎをはりてかへりなばやと、おもひいとなむことなかれ。ひそかに東司上不説仏法の道理を思量すべし。

「洗淨」(二卷八九頁)

いまの観身不浄の宗旨、またかくのごとし。これによりて蓋身・蓋観・蓋不浄、すなはち嬢生袈裟なり。袈裟、もし嬢生袈裟にあらざれば、仏祖いまだもちいざるなり、ひとり商那和修のみならんや。この道理、よく

よくここをとめて参学究尽すべし。

「三十七品菩提分法」(二卷一三三頁)

51

已生惡令滅といふは、已生は尽生なり、尽生なりとは、半生なり、半生なりとは、此生なり。此生は被生礙なり、跳出生之頂顚なり。これをして滅ならしむ、といふは、調達生身入地獄なり、調達生身得授記なり、生身入驢胎なり、生身作仏なり。かくのごとくの道理を拈来して、令滅の宗旨を、参学すべきなり。滅は、滅を跳出透脱するを滅とす。

「三十七品菩提分法」(二卷一三五頁)

52

在家心と出家心と一等なり、といふこと、証拠といひ、道理といひ、五千余軸の文にみえず、二千余年のあとなし。五十代四十余世の仏祖、いまだその道取なし。たとひ破戒・無戒の比丘となりて、無法・無慧なりといふとも、在家の有智・持戒にはすぐるべきなり。僧業これ智なり、悟なり、道なり、法なるがゆえに。

「三十七品菩提分法」(二卷一四三頁)

53

不落因果、たとひ迦葉仏時にはあやまりなりとも、釈迦仏時はあやまりにあらざる道理もあり。不昧因果、たとひ現在釈迦仏のときは脱野狐身すとも、迦葉仏時、しかあらざる道理も現成すべきなり。

「大修行」(二卷一八七頁)

54

三蔵学者の凡夫なる、いかでか国師の渾身をしらん。この道理、かならず一定すべし。

「他心通」(二卷二四五頁)

55

尺璧、なほ宝にあらず、寸陰、これ要極なり。五、六通、たれの、寸陰をおもくせんか、これを修習せん。おほよそ他心通のちから、仏智の辺際におよぶべからざる道理、よくよく決定すべし。

「他心通」(二卷二四七頁)

56

しかいふに、国師いまだいはず、なんぢ三蔵、まことに老僧所在をしれり、とゆるさず、ただかさねざまに三度、しきりに問するのみなり。この道理をしらず、あきらめずして、国師よりのち数百歳のあひだ、諸方の長老、みだりに下語、説道理するなり。

「他心通」(二卷二五一頁)

57

これより十二巻本

この刹那生滅の量、ただ仏世尊ならびに舍利弗とのみしらせたまふ。余聖おほかれども、ひとりもしるところにあらざるなり。この刹那生滅の道理によりて、衆生、すなはち善惡の業をつくる、また刹那生滅の道理によりて、衆生、発心・得道す。

「出家功德」(二卷二七四頁)

出家の、我・我所にあらざる道理かくのごとし。我・我所にあらざれば、諸仏の法なるべし、ただこれ諸仏の常法なり。

「出家功德」(二卷二八三頁)

糞掃の、絹・布にあらず、金銀・珠玉にあらざる道理を信受するとき、糞掃現成するなり。絹・布の見解、いまだ脱落せざれば、糞掃也未夢見在なり。

「袈裟功德」(二卷三〇九頁)

今釈迦牟尼仏の袈裟、弥勒如来、著しますに、みぢかきにあらず、せばきにあらず。仏身の、長短にあらざる道理、あきらかに観見し、決断し、照了し、警察すべきなり。

「袈裟功德」(二卷三二一頁)

仏法をしらず、仏法を信ぜざるものは、刹那生滅の道理を信ぜざるなり。もし如来の正法眼蔵涅槃妙心をあきらむるがときは、かならずこの刹那生滅の道理を信ずるなり。いまわれら、如来の説教にあふたてまつりて曉了するにたれども、わづかに恒刹那よりこれをしり、その道理、しかあるべしと信受するのみなり。

「発菩提心」(二卷三三六頁)

われらが寿行、生滅刹那、流転捷疾なること、かくのごとし。念念のあひだ、行者、この道理をわすれることなかれ。

「発菩提心」(二卷三三八頁)

しかあればすなはち、仏果菩提の功德、諸法実相の道理、いまのよにある凡夫の、おもふがごとくにはあらざるなり。

「供養諸仏」(二卷三六一頁)

たとひこれらの戒にことなる法なりとも、その道理、もし孤樹・制多等の道理に符合せらば、帰依することなかれ。人身うることかたし、仏法あふことまれなり。いたづらに鬼神の眷属として一生をわたり、むなく邪見の流類として多生をすごさん、悲むべし。はやく仏法僧の三宝に帰依したてまつりて、衆苦を解脱するのみにあらず、菩提を成就すべし。

「帰依仏法僧宝」(二卷三七六頁)

この一段の因縁、天聖広燈録にあり。しかあるに、参学のともがら、因果の道理を明らめず、いたづらに撥無因果のあやまりあり。

「深信因果」(二卷三八八頁)

参学のともがら、まさにいそぎて因果の道理を明らむべし。今百丈の不昧因果の道理は、因果にくらからずと

なり。

「深信因果」(二卷三九〇頁)

67

おほよそ因果の道理、歴然としてわたくしなし。造悪のものは墮し、修善のものはのぼる、毫釐もたがはざるなり。もし、因果亡じ、むなしからんがときは、諸仏の出世あるべからず、祖師の西来あるべからず、おほよそ衆生の見仏聞法あるべからざるなり。因果の道理は、孔子、老子等のあきらむるところにあらず、ただ仏祖祖、あきらめ、つたへましますところなり。

「深信因果」(二卷三九四頁)

68

このとき因果を撥無し、三宝を毀謗せん。もしかくのごとくならば、即ち命終し、地獄におつべし。かくのごとくならざるによりて、天上にむまるるなり。この道理、あきらめしるべし。

「三時業」(二卷四〇七頁)

69

皓月が問は、業不亡の道理によりて、順後業のきたれるにむかうて、とふ処なり。

「三時業」(二卷四一〇頁)

70

この三時業の道理あきらめざらんともがら、みだりに人天の導師と称することなかれ。

孔・老を習学するもの、仏法を測量することいまだなし。いま宋国の輩、おほく孔・老と仏道と一致の道理をたつ、僻見、もともふかきものなり。

「四禪比丘」(二卷四二五頁)

学者明らかにしるべし、孔・老は、三世の法をしらず、因果の道理をしらず、一洲の安立をしらず、況や四洲の安立をしらんや、六天のこと、なほしらず、況や三界九地の法をしらむや、小千界、しらず、中千界、しるべからず、三千大千世界をみることあらむや、しることあらんや。

「四禪比丘」(二卷四三三頁)

然かあれば、心をおこすより、さとりをうるにいたるまで、かならず尽大地と尽衆生と、さとりも、おこなひもするなり。これにいかにかうたがふおもひもあるべきに、しられぬおもひもまじるにたをあきらめんとて、如是のこえのきこゆるも、人のやう、とはあやしまざるべし。是は、心うる、をしへにては、三世の諸仏のこころをもおこし、おこなふは、かならず、われらが身心をばもらさぬことわりの有なり、とするべし。

これをうたがひおもふは、すでに三世の諸仏をそしるなり。しづかにかえりみれば、我らが身心は、まことに三世の諸仏とおなじくおこなひける道理あり、発心しける道理もありぬべくみゆるなり。

「唯仏与仏」(二卷五二五頁)

四 『随聞記』における道理

続いて、道元『随聞記』における道理を示す。引用は春秋社本『道元禅師全集』を用い、その巻数頁数のみを記した。

1

此国の人は、また我がために、利を思ひて施を至す。笑て向へる者に、能くあたる、定れる道理也。他の心に随んとせば、是学道の礙なるべし。ただ飢を忍び、寒を忍びて、一向に学道すべき也。

『随聞記』一（七卷五五頁）

2

示云、俗の帝道の故実を言に云、虚襟に非れば、忠言を入れず。言は、己見を存せずして、忠臣の言に随て、道理に任せて帝道を行也。

衲子の学道の故実も、又如是なるべし。若し己見を存せば、師の言ば耳に入らざる也。師の言ば耳に入ざれば、師の法を得ざるなり。

又只法門の異見を忘るるのみに非ず、又世事を返して、飢寒等を忘て、一向に身心を清めて聞時、親く聞にである也。如是聞時、道理も不審も明めらるる也。

『随聞記』一（七卷六三頁）

3

或時、莽、師に問て云、如何是、不昧因果底の道理。
師云、不動因果也。

『随聞記』二（七卷六七頁）

4

示云、無常迅速也、生死事大也。暫、存命の間、業を修し、学を好には、只、仏道を行じ、仏法を学すべきなり。文筆詩歌等、其詮なき也。捨てき道理、左右に及ばず。仏法を学し仏道を修するにも、尚、多般を兼学すべからず。

『随聞記』二（七卷七二頁）

5

莽問云、若然、何事いかなる行か、仏法に専ら好み修べき。

師云、機に随、根に随べしと云へども、今祖席に相伝して専する処は坐禅也。此の行、能、衆機を兼、上中下根等、修し得べき法也。我、大宋天童先師の会下にして、此道理を聞て後、昼夜定坐して、極熱極寒には発病しつべしとて、諸僧、暫く放下しき。我、其時自思はく、直饒発病して死べくとも、猶、只、是を修べし。

『随聞記』二（七卷七四頁）

6

学者、命を捨てるとして、暫く推し静めて、云べき事をも、修すべき事をも、道理に順ずるか、順ぜざるかと案じて、道理に順ぜば、いひもし、行じもすべき也。

『随聞記』二（七卷七五頁）

又、冥機冥応、顕機顕応等の四句有る事を可思。又、現生後報等の三時業の事も有り。此等の道理、能能可学也。

『随聞記』二（七卷七九頁）

答云、外相を不荘と云て、即、放逸ならば、又是、道理にたがう。実徳をかくすと云て、在家等の前に悪行を現ぜん、又是、破戒の甚しき也。只、希有の道心者の由を人に知られんと思ひ、在身失を人に不被知と思ふ。諸天善神及三宝の冥に知見する処を不愧、人に貴られんと思ふ心を誠る也。只、臨時、触事、為興法為利生、諸事を斟酌すべき也。擬して後、言、思て後、行じて、率暴なる事勿れと也。所詮は、一切の事に臨で、可案道理也。念々に不留、日々に遷流して、無常迅速なる事、眼前の道理なり。（中略）如是の事も、臨時触事、思量道理、不思人目、忘自益、仏道利生の方によりき様に可計。

『随聞記』二（七卷八一—八二頁）

元来、所学、教家文字の功も、可捨道理あらば捨、今の義につきて可見也。学法門事は、もとより、出家得道の為也。我所学、多年の功を積み、何ぞやすく捨んと、猶、心深思ふ、即、此心を、生死繫縛の心と云也。能々可思量。

『随聞記』三（七卷八七頁）

只、聖教をみるとも、文に見ゆる所の理を、次第にこころへてゆかば、その道理を、えつべきを、先づ文章に、対句韵声などを見て、よき、あしきぞ、と心に思て、後に理をば見也。然らば、なかなか知らずして、はじめより道理を心る得てゆかば、よかるべきなり。

『随聞記』三（七卷九二頁）

又、発此志、只、可思世間無常也。此言、又、仮令に觀法などに、すべき事に非ず。また無事を造て、思ふべき事にも非ず。真実に、眼前の道理也。人のをしむ聖教文証道理を待つべからず。朝に生じて、夕に死し、昨日見人、今日無き事、遮眼、近耳。是は、他の上にて、見聞する事也。我身にひきあてて、道理を思ふ事を。直饒、七句八句に、命を期すべくとも、遂に可死道理有らば、其間の樂み悲み、恩愛怨敵を思ひとけば、何にてもすごしてん。只、仏道を思て、衆生の樂を求むべし。況や、我れ年長大せる人、半に過ぬる人、余年幾なれば、学道ゆるくすべき。

此道理も、猶、のびたる事也。世間の事をも、仏道の事をも思へ。明日、次の時よりも、何なる重病をも受て、東西も不弁、重苦のみかなしみ、又、何なる鬼神の、怨害をも受て、頓死をもし、何なる賊難にも逢ひ、怨敵も出来て、殺害奪命せらるる事もや有ん。真実に不定也。然ればこれ程に、あだなる世に、極めて不定なる死期をいつまで、いきたるべしとて、種々の活計を案じ、剩へ他人の為に、惡をたくみ思ふて、徒に時光を過す事、極めて愚なる事也。

此道理、真実なれば、仏も是を衆生の為に説き、祖師の普說法語にも、此道理をのみ説く。今の上堂請益等にも、無常迅速、生死事大を云也。返々も、此道理を、心に忘れずして、只、今日今時許と思て、時光を失はず、学道に心を入る可也。其後、真実に易き也。性の上下、根利鈍、全く不可論。

示云、此見解、語与理、相違せり。外に向て不可求と云て、行をすて、学を放下せば、行をもて所求有りと聞へたり。不求あらず。只、行・学、本より仏法なりと証して、無所求にして、世事惡業等の、我が心に作したくとも不作、学道修行の、懶きをもなして、此行を以て、果を得きたるとも、我心先より求める事無して、行ずるをこそ、外に向て求める事無と云、道理には可叶けれ。

若、捨今生、入仏道たらば、老母、直饒、餓死すとも、一子を放して、道に入れしむる功惠、豈、得道良縁に非ざらんや。我も、広劫多生にも、難捨恩愛を、今生人身を受けて、仏教に遇へる時、捨てたらば、眞実報恩者の道理、何ぞ不叶仏意哉。一子、出家すれば、七世のをや、得道すと見へたり。何、一世の浮生の身を思つて、永劫安樂の因を、空く過さんやと云道理もあり。是を能々自はからふべし。

只請、学人静坐して、以道理、可尋此身之始終。身軀髮膚者、父母之二滴、駐於一息、離散於山野而、終作泥土。何以故、執身耶。況、以法見之、十八界之聚散、何法定為我身。雖教内教外別、我身之始終不可得事、以

之、為行道之用事、是同。先、達此道理、実仏道顕然者也。

『随聞記』四（七卷一一七頁）

15

又我がおこせる心は、皆経論・伝記等には、厭い惡み、きらへる心にて、有りけりと思より、漸く心つきて思に、道理をかんがふれば、名聞を思とも、当代下劣の人に、よしと思はれんよりも、上古の賢者、向後の善人を可恥。ひとしからん事を思とも、此国の人よりも、唐土天竺の先達、高僧を可恥。かれにひとしからんと思べし。乃至諸天冥衆、諸仏菩薩等を恥、かれにひとしからんこそ、思べきに、道理を得て後には、此国の大師等は、土かわらのごとく覺て、從來の身心皆改ぬ。

『随聞記』五（七卷一二二頁）

16

須く閑に坐して、道理を案じて、終にうち立ん道を、思ひ定むべし。主君父母も、我に悟りを与ふべきに非ず。恩愛妻子も、我がくるしみを、すくうべからず。財宝も死をすくはず。世人終に我をたすくる事なし。非器なりと云て修せずは、何の劫にか得道せん。只須、万事を放下して、一向に学道すべし。後時を存ずること莫るべし。

『随聞記』六（七卷一三六頁）

17

身心を仏法に放下しつれば、くるしく愁うれども、仏法にしたがつて、行じゆく也。乞食をせば、人、是をわるしと、思はんずるなど、是の如く思ふ程に、何にも仏法に入り得ざる也。世情の见をすべて忘て、只、道理に任て、学道すべきなり。

『随聞記』六（七卷一三七頁）

時に先師、弟子及同朋等をあつめて、商議して云、我、幼少の時、双親の家を出でて後、此師の覆育を蒙て、今、成長せり。世間養育の恩、尤も重し。又出世法門の事、大小権実教文、因果をわきまへ、是非を知て、等輩にもこへ、名譽を得たる事も、又仏法の道理を知て、今入宋求法の志を、おこすまでも、彼の恩にあらずと云こと無し。然るに、今年、すでに窮老して、重病の床に臥し給へり。余命存じがたし。後会、期すべきに非ず。よてあながちに是をとどむ。彼の命もそむき難し。今、不顧身命、入宋求法するも、菩薩の大悲、利生の為也。彼の命にそむき、宋土にゆかん道理如何。各々、存知を、のべらるべし。(中略)

時に先師、皆の議をはりて云、各々の議定、皆とどまるべき、道理なり。我が所存は然らず。今度止りたりとも、決定死ぬべき人ならば、其によりて命のぶべからず。又、我とどまりて、看病外護せんによりて、苦痛も、やむべからず。又最後に我があつかひ、勧めんによりて、決定、生死を可離道理にもなし。只、一旦、命に随ひたる、うれしさばかりか。是によりて、出離得道の為に、一切無用也。(中略)

先師にとりて、真実の道心と、存ぜん事、是等の心也。然れば、今の学人も、或は父母の為、或は師匠の為に、無益の事を行じて、徒に時を失ひ、勝れたる道を指おきて、光陰をすぐす事なけれ。

時に特公云、真実求法の為には、有漏の父母、師僧の障縁を、すつべき道理、然るべし。

『随聞記』六(七卷一三九—一四〇頁)

一日、示云、世間の人、自云、某甲し、師の言を聞に、我が心になはず。我思に、此言非也。其心如何。若、聖教等の道理を心得をし、すべて、其の心に違する、非なりと思か。若、然らば何ぞ師に問ふ。(中略)

我れ当年、傍輩の中に、我見を執て、知識をとぶらひ、我心に違をば心得ずと云て、我見到相叶を執て、一生虚く、仏法を会せざりしを見て、知、発して、学道は不可然と思て、師の言に随て、暫く道理を得て、其後、看經の次に、或經に云、仏法を学せんとおもはば、三世の心を相続する事なかれ、と。知りぬ、先の念を記持せずして、次第に改めゆくべき也。

『随聞記』六（七卷一四一頁）

たとへば、藍にそめたる物はおく、麤にそめたるものは、きなるが如に、邪命食をもて、そめたる身心は、即ち邪命身也。此身心をもて、仏法をのぞまば、沙をおして、油をもとむるが如し。只、時にのぞみて、ともかくも、道理にかなふやうに、はからふべき也。兼て思ひたくはふるは、皆たがふ事也。能々思量すべき也。

『随聞記』六（七卷一四八頁）

五 『伝光録』における道理

続いて、道元の法孫である瑩山禪師（以下瑩山）の『伝光録』における道理を示す。引用は宗務庁版『伝光録』を用い、その章名及び頁数のみを記した。

若し恁麼ならば、何を呼んでか、成道底の道理とせん。且問す、大衆、瞿曇の、諸人と与に成道するか、諸人の、瞿曇と与に成道するか。若し諸人の、瞿曇と与に成道すると言ひ、瞿曇の、諸人と与に成道すると言はば、全くこれ瞿曇の成道にあらず。因て成道底の道理と爲すべからず。成道の道理、親切に会せんと思はば、瞿曇、諸人、一時に払却して、早く我なることを知るべし。

「釈迦牟尼仏章」一七頁

所以者何となれば、汝が見聞、卒に他の耳目を仮らず、汝が手足、他の動靜を用ゐず。衆生も恁麼なり、諸仏も恁麼なり。彼れ是れを学び、是れ彼れを学ぶは、卒に是れ親きに非ず。豈道とすべけんや。恁麼の道理を護持保任する故に、口にもいはず、足ふまず、稍や五十年を経たり。

「伏駄密多尊者章」六五頁

実に夫れ眞實我を見得する人は、自己尚ほ存せず、豈萬法の眼に遮ぎることを得んや。見聞覚知終に分たず、一事一法、更に分つことなし。故に聖凡隔てなく、師資の道合す。此道理を見得する時、乃ち佛祖に相見すとす。故に自己を以て師とし、師を以て自己とす。刀斧斫ども開けず。恁麼の道理豁然として契ふ。

「僧伽難提尊者章」一〇九頁

悲むべし、如来在世より八百年、尚ほ是の如し。何に況や後百歳の今、僅に仏法の名字を聞くと、道理如何なるべしとも弁まへず。到れる身心なき故に、如何なるべきぞと尋ぬる人なし。聊か其道理を得ることあれども、護持し來ることなし。

「僧伽難提尊者章」一一〇頁

然るを諸人、此道理に達せず、或は思はく、声色は妄りに立する虚仮なり、須らく払ひ掃ふべし。

「摩拏羅尊者章」一三七頁

心、墻壁の如くにして以て道に入るべし。師、尋常説心説性すれども、道理に契はず。大師、祇だ其非を遮り、為に無念の心体を説かず。

「大祖大師章」一六九頁

和漢の隔てなく古今の別なからん。且らく作麼生か指注して、此道理に相応することを得ん。

「大満禪師章」一八三頁

知るべし、汝正に揚眉瞬目なからんや。只彼見聞覚知する者を見得せば、天下老和尚の舌頭を疑がはじ。且らく如何が此道理を注脚し去ん。

「弘道大師章」二〇九頁

且らく如何が這箇の道理を通じ得てん。大衆聞かんと要すや。

「雲巖無住大師章」二二一頁

子細に見得せば、必ず後日洞山高祖の如く、他の為に模範となることを得ん。且らく如何が此の道理を説取せん。

是れ身口意の分つ所に非ず、是れ心意識の辨ふべきに非ず。如何が此道理を通じ得ることあらん。

「同安不禪師章」二三四頁

子細に精到して須らく恁麼に相応すべし。諸禪徳、如何が這箇の道理を会することを得ん。便ち代て一語を着けん。早く須らく體前に眸を附くべし。

「後同安大師章」二三八頁

廓然明白にして唯了了として知るのみなり。且く道へ、這箇の道理、如何が露はし得んや。

「梁山和尚章」二四五頁

且く如何が此這箇の道理を通ずることを得ん。聞かんと要すや。

「大陽明安大師章」二五〇頁

明暗に属せず男女に非ざる一物あり。如何が此道理を通ぜん。

「投子和尚章」二五八頁

子細に思量し精到して見よ。他に依らず廓然として開悟せんこと虚空の如くならん。且く道へ、如何が此道理を少分も通ずることを得ん。

「悟空禪師章」二七四頁

若し向上の事を知らば頂門の眼開けて、此時少分相応の処あり。且く道へ、如何ならんか道理。

「天童珎禪師章」二七八頁

故に此処に親く承当せんと思はば参徹して得べし。坐定に依らず蝦蟇の語を為さず。如何ならんか、是れ此密語覆蔵せざる道理。

「雪竇鑑禪師」二八四頁

若し子細に明らめ得ば、天下の老和尚、三世の諸仏の舌頭を疑はじ。如何ならんか此道理。聞かんと要すや。

「永平元和尚章」三〇二頁

六 慈円における「道理」

以上、慈円『愚管抄』、道元『正法眼蔵』、道元『随聞記』、瑩山『伝光録』における道理の使用例を挙げた。都てではないが、大凡のものは記したと思う。

それでは次に、慈円における道理の特徴を見てみたい。その際、道元における道理も比較可能な場合は随時示し

た。引用に関して、『愚管抄』は愚、『正法眼蔵』は正、『隨聞記』は隨、『伝光録』は伝と略しそれぞれの番号を付した。例、『愚管抄』1↓愚1。

不可解な歴史に道理あり

多賀宗隼氏は慈円の道理について次のように述べている。

不可解のものを解することは、その中にすじみちを発見することである。道理の存在を自覚することによって不可解はおのずから解ける。⁽²⁸⁾

不可解のものを理解することによって、道理の存在を自覚することになるという。また、次のようにも述べている。

一見不可解のことも、「心得ル」「按ズル」こと、すなわちさらに深い考察を経ることによって、何等かの開明に達する。(中略) 歴史上の事件は、それぞれに道理をになっており、道理のあらわれに外ならない。⁽²⁹⁾

一見不可解な歴史も更なる考察によって開明される。歴史上の事件それぞれが道理を保持し、道理の顕われであるとす。

多賀宗隼氏は慈円における歴史と道理について次のように要約している。

要約すれば、(1) 歴史上に不可解の事件に注目する。(2) その事件の歴史的必然性を見出す。それがやがて道理に通じている。(3) 二つ以上の道理が相関係するとき、その間には大小・軽重がある。そこでは軽きを以って重きに從わしめる、という道理の間の調整が行われねばならぬ。(4) 新しい事実は新しい道理を示しつつ歴史につきつぎに登場して、道理を歴史の上にのこしてゆく。歴史上の人物はこの事件の推進者として、この道理の担い手になる。個人は道理の担い手たるところに歴史的重要性がある。(5) つぎつぎと歴史上に累積されてゆく道理の全体が日本の伝統を形づくってゆく。⁽³⁰⁾

歴史上に不可解の事件があり注目し考察していくと必然性があり、その歴史には道理が存在するという。さらに、多賀宗隼氏は次のように述べている。

この点からいえば歴史は、対局おりみて、結局正しい道を辿ってきている、ということになるであろう。このことについて考え合せられることは、歴史上の事実は、すべてあらかじめ予定されている、とする一種の予定調和の説ともいべき観方である。それは「一切ノ事ハカク初メニメデタクアラハシオカルルナルベシ」ということばにも知られる所である。かかる観点の中心になっているのは、慈円の神祇信仰、とくに皇室と藤原氏との祖神の信仰である。すなわち日本の歴史は、畢竟してこれら祖神の予定の計画の展開であると信ずるのである。⁽³¹⁾

慈円にとつて歴史上における事象は正しい道を辿ってきているという。それは予定調和の説ともいべき見方であるという。予定と言えば、例えば、イスラム教の六信の一つに、カダル（予定、定）すべての万物・人間の運命が神によつて定められているという説がある。或いは、予定調和とはライブニッツの形而上学思想の核心をなす考え方であり、現実的世界の創造に先立つ神の可能的世界の構想のうちに、諸実体の間の調和があらかじめ定められており、それにもとづいて創造された世界の事物の間に予定された調和の關係が実現されることを説く説である。イスラム教においてもライブニッツにおいては神への信仰が根本にある。慈円は「皇室と藤原氏との祖神の信仰」があると多賀氏は述べているが、神仏習合の世界に生きており、仏教者であると同時に神道者でもある。

小堀桂一郎氏は次のように述べている。

我が国の慈円は、歴史とは道理の顕現の過程であり、人間は道理への洞察によつてその顕現に貢献することができると説いて、キリスト教世界よりも明らかに高い次元の人間本位主義を樹立してゐた。⁽³²⁾

慈円はキリスト教世界よりも高次元の人間本位主義を樹立したという。

慈円の道理に関して大隅和雄氏は次のように述べている。

すべての存在はただ道理という二文字によってささえられていて、そのほかには何も無いことがわかってくるであろう。間違つた悪事も道理によつてささえられているということを理解し弁別することがしごく大切なことなのである。⁽³³⁾

たとい悪事に於いても道理によつて支えられているのである。

愚31には、「是ヲモ心得ベキ道理定メテアルラント案ヲメグラスニ」とあつて、歴史の不可解な事象に思い、考えをめぐらすことによつて、今まで分からなかつた道理が見えてくる。ここでは、宝剣がなくなつた理由は武士が表れて天皇の守護者となる世の中に變化したからであると見なしている。

道理に複数あり

大隅和雄氏は次のように述べている。

慈円は、歴史を凝視するうちに、世の中にあるもの生起することがらは、どんな物事でもそれがそのようになる道理を持つていてと考えた。そして、どんな物事もそれぞれの道理を持つているにもかかわらず、世の中がさまざまに対立する道理を包みながら一つの方向に動いて行くのは、無数の道理の中に、たとえば公的な道理と私的な道理、大きい道理と小さい道理、重い道理と軽い道理というような区別があり、私的な道理は公的な道理に、小さい道理は大きな道理に、軽い道理は重い道理に圧倒され、併吞されて行くのだと解釈した。⁽³⁴⁾

道理は公私、大小、軽重というように複数あるという。

愚4には、「此道理ドモヲ思ヒ續ケテ。」とあつて、複数形で示されている。

正19には、「しかあれども、道理この一條のみにあらず」とあつて、道理が複数なることが記されている。

道理に軽重あり

大隅和雄氏は次のように述べている。

慈円は、西行が遠くに見据えていた精神の自由という観念を否定し、さらにそういうものについて考えることも認めませんでした。すべてのものごとは、道理によつてあらしめられているという主張がそれです。『愚管抄』の中で、慈円が「道理」というものを見出して行く過程は、歴史の動きを可能な限り凝視しつづけ、すべて存在するものはそれ自体の道理をもっていることを理解した上で、無数の道理の中で、大きく重い道理、公的な道理が、小さく軽い道理、私的な道理を併呑し、踏み潰して行くことを確認して行くという極めて複雑な考察が積み重ねられて行く過程でした。⁽³⁵⁾

複数の道理の中で、小さく軽い道理よりも大きく重い道理が、私的な道理よりも公的な道理が勝っていると述べている。

愚12には、「又モノ、道リニハ一定軽重ノアルヲ。オモキニツキテカロキラスツルゾト云コトハリト」とあつて、ものごとの道理というものには、きまつた軽重というものがあつて、重い道理を立てて軽い方を捨てるのだということが記されている。

愚13には、「物ノ道リヲタツルヤウハ。コレガ誠ノ道リニテハ侍ル也。次ニ世間ノ道リノ軽重ヲタツルニ。」とあつて、誠の道理と世間の道理があるという。

愚29には、「只器量ノ淺深。道理ノ輕重ヲコソトヲボシツ、御沙汰ハアル事ナルヲ」とあつて、人の人格才能の浅深と、道理の軽重が説かれている。

愚30には、「トテモカクテモ物ノ道理ノ重キ輕キヲヨクヨク知テ」とあつて、物事にそなわっている道理の輕重をよくよくわきまえて、それに違背しないようにふるまうべきことが説かれている。

随18には、「すつべき道理、然るべし」とあつて、道理に輕重あり、重要でない道理は捨てるべきであると示している。

道理は変化する（過去の方が良い）

多賀宗準は次のように述べている。

しかるに第二にこれと反対の悲觀的觀點がこれにむすびついている。道理は、横に無數の大小・輕重さまざまの關係の総体があると同時に、また縦に、時代時代がそれぞれに道理をもち、「世ノ中ノ道理ノ次第第二ツクリカヘラレテ」変遷してゆく。かくして、わが国は道理がそのままに行われる上代の理想的時代から、しだいに道理が行われなくなり、結局目前のことのみを見て後をかえりみない、「道理トイフモノハ無キ」現代まで落ち下ってきた、とされる。かかる史觀がいわゆる末法思想に依っていることはいふまでもない。³⁶⁾

時代によつて道理が変化しているという。そして、上代が理想的であり、時代が下るに従つて、道理が行われなくなった。

それが生起した時期、時代の道理によつてきまるのであり、時期、時代によつて道理が変わつて行くことに氣付いたのである。³⁷⁾

愚8には、「コノ道理ニソムク心ノミアリテ。イトゞ世モミダレ。ヲダシカラヌ事ニテノミ侍レバ」とあつて、道理というものに反する心ばかりがあるので、そのためにいよいよ世の中も乱れ、穏やかならぬことばかりになつてしまふのである。つまり、道理に従えば乱世がなくなる。

愚29には、「末代ザマハソノ人ノ心ニ物ノ道理ト云モノ、クラクウトクノミナリテ」とあって、末代にはその人の心がものの道理というものを理解できなくなることが記されている。

愚37には、「スベテ末代ニハ犬ノ星ヲマボルナンド云ヤウナル事ニテエヘヌ也」とあって、末代には、人々はすべて物ごとの真の意味を理解することができなくなると説かれている。

愚38には、「世中ノ道理ノ次第二ツクリカヘラレテ」とあって、世の中の道理が順次作りかえられながら世の中をささえることが説かれている。また、道理が人間を守っているとも書かれている。

愚40には、「コノヤウニ世ノ道理ノウツリユク事ヲタテムニハ。一切ノ法ハタゞ道理ト云ニ文字ガモツ也。其外ニハナニモナキ也」とあって、世の道理というものが移り変わっていくことを明らかにしようとするならば、すべての存在はただ道理という二文字によってささえられていて、そのほかには何もなかったりくるであろうと記されている。さらに、間違った悪事も道理によってささえられていとも記されている。善悪ともに道理によってささえられている。

愚44には、「スコシハ世ノウツリ物ノ道リノカハリユクヤウハ。人コレヲワキマヘガタケレバ」とあって、世の中が移り変わってもものの道理が変化していく次第は、人間には理解しにくいものであることが書かれており、道理の推移が記されている。また、本書を読む人は、書いてあることを自分の心の中に入れて、自分でよく考えてみることをしなければ、道理の推移というものを決して理解することはできないであろうとあるから、これは公案参究と共通している。

これに関して、愚45には、「コレホドノヤウヲフカク思ヒトカヌ所ニ事ハイデクル也」とあって、これほどまでにさまざまなことを深く考えて理解することが必要なものであり、それをしないことから様々な事件が起こってくると説かれている。考えることの重要性が記されている。

正53には、「不落因果、たとひ迦葉仏時にはあやまりなりとも、釈迦仏時はあやまりにあらざる道理もあり。不昧因果、たとひ現在釈迦仏のときは脱野狐身すとも、迦葉仏時、しかあらざる道理も現成すべきなり」とあつて、迦葉仏時、釈迦仏時と時代によつて道理が異なることが記されている。

仏法の道理、王法の道理

大隅和雄氏は、慈円が思いつづけた道理に関して次のようにまとめられている。

一、目に見えぬ神仏の世界と、人間の世界とが和合して、道理がそのまま道理として通っている状態が、まずはじめにある。これは神武から十三代（成務）までであろうか。

二、目に見えない神仏の世界の道理はずんずんと移り変わっているのに、目に見える世界にいる人間にはそれが理解できないという道理が出てくる。ここでは物ごとの前後、首尾が行き違い食い違つたりしているので、善いことも善いこととして貫徹せず、悪いことも悪いままでは終わらないということを人々は理解できないのである。この段階は仲哀から欽明までとするのが適當であろうか。

三、現世の人間にはこれが道理だと思われ、すべての人がそれを認めているのに、それが目に見えぬ神仏の御心になわなないという道理がつぎにあらわれるのである。こうなると人間がこれはいいと思つてしたことが、かならず後悔を招くことになつてしまふ。はじめはこれは道理にもとづいていてと思つてした人間が、のちになつて思い合わせてみると、神仏の御心になつていないと気づくのである。これは敏達から後一条の時、つまり御堂関白（道長）までであろう。

四、今あることを処理している間は、自分も他人もこれこそ道理になつていてと思つているものであるが、そこに知恵のある人があらわれて、これはまったく理由のないことだというと、本当にそうであつたと反省す

るという道理がそのつぎにくる。これは末世の人が本当にそうあってほしい姿の基本をなす道理である。そして、この段階は宇治殿（頼通）から鳥羽上皇までであろう。

五、はじめから、あることで議論が二つに分かれ、びしびしと論争して動揺する間に、さすがに道理というものは一つであるから、その一つの道理に向かつて議論が勝ち進んでいき、それを実行するという道理があらわれる。これはもともと道理を知っているというものではないが、すぐれて威徳のある人物が主人である場合は、この方法を用いて事を行なうのが道理になつてゐる。この段階は、武士の世界でいえば頼朝までである。

六、さてこうして道理というものを分別することができなくなり、あれこれと論じたり、結論が出ないままで過ぎていくうちに、ついに一つの考えに従つて事を処理すると、悪い心の誘う方向に流され、道理に反することを道理にしようとする悪い企てをするようになり、間違つた道をたどるようになるのが道理だという道理があらわれる。これは世が移り変わつていく有様が、間違つた方向へと進む場合にすべてあらわれる道理で、悪い形勢が時代とともにさらに下落していく過程の道理なのである。これは後白河上皇から現在の後鳥羽上皇が皇位についておられた時までに対応するであろう。

七、ものみなすべて、はじめに考え企てたことが、自分も人も道理というものを少しも知らないためにただ成り行きまかせになつてしまひ、先のことなど考えてみようともしないような状態。例えば、回虫の病気が重くなつた人が、今は自覚症状がないのですが、それが渴くからといって水を飲んだりすれば、やがて病気が重くなつて死に至るのと同じ道理なのである。そしてこれが今の世の道理である。そうだとすると、今はもう道理というものはなくなつてしまつたのであろうか。⁽³⁸⁾

一から七まで時代毎の変遷が簡潔に記されている。神武天皇から成務天皇の頃までは目に見えぬ「神仏の世界」と

「人間の世界」とが和合しうまくいき、道理がそのまま道理として通っている状態であったが、次第に両者が乖離して「人間の世界」が墮落していき、慈円が在世中においては道理を道理と知らないために道理が成り立たなくなってきたという。

愚13には「コレガ誠ノ道リニテハ侍ル也。次ニ世間ノ道リノ軽重ヲタツルニ」とあつて、誠の道理と世間の道理の区別が立てられている。

愚14には、「佛法王法マモラルベキ道リノ重サガ。ソノ時ニトリテ引ハタラカサルベクモナキ道理ニテアリケルナリ」とあつて、推古天皇が即位なさり、聖徳太子が摂政におなりになって、仏法が王法を守るといふ重い道理が、その時の歴史を動かさざるをえない筋道になっていたのであつたとある。仏法が王法を守るといふ道理は重い道理と見なしている。

愚15には「コノ佛法ノ方王法ノ方ノ二道ノ道リノカクヒシト行アイヌレバ」とあつて、仏法の方からと王法の方からと、両法の道理が固くしつかりと一致することが重要であるとする。

愚17「因果ノ道リナラン事。道リカナハズ。(中略)マメヤカノ道リノコレ程キワマラン時ハ」とあつて、仏法の因果の道理と真実の道理が区別されており、真実の道理をより重視している。

愚48には、「ソレヲバ一向ニ事ニゾミテ。道理ニヨリテ万ノ事ノヨコナハルベキ也。一向ニ天道ニ任セマイラセテ。无道ニヨコナハゞ冥罰ヲマタルベキ也」とあつて、道理によつて万事を処理なさるべきであり、そうでなければ神々の眼に見えない罰が下されるであろうと書かれており、「神仙の世界」の重要性が記されている。

多賀宗隼氏も次のように記されている。

このこと全体の示していることは、仏法によつて王法(政治)を守るべきだということ、仏法なくして王法なしという道理、同時に道理の間には軽重あり、軽きを去つて重きにつくべきだということなのである。⁽³⁹⁾

仏法によつて王法や帝道を守るべきであるという。

愚14には、「ソノ時ニトリテ引ハタラカサルベクモナキ道理ニテアリケルナリ。ソレヲ殺シツルコトハ。コノ馬子大臣ヨキコトヲシツルヨトコソ。世ノ人思ヒケメ。シラズ又推古ノ御氣色モヤマジリタリケントマデ。道リノヲサルルナリ」とあつて、仏法が王法を守るといふ重い道理が、その時の歴史を動かさざるをえない筋道になっていた。それ故馬子大臣が崇峻天皇を殺害したことは、正しいことであつたと世の人も思つたのであろう。

この考え方は道元にも見出される。道元は『護国正法義』を著されたとされ、正法、つまり仏法によつて国家太平がもたらされるという考え方があつたと思う。

正13には唐朝の第十一代憲宗皇帝に関する話が示されているが、臣下に韓愈文公という仏法を参学する者がおり、道元は彼を「丈夫の志氣あり、回転天地の材」とある程度まで高く評価している。これも仏法と王法の関係を示すものといつてよい。

随2には、「示云、俗の帝道の故実を言に云、虚襟に非れば、忠言を入れず。言は、己見を存せずして、忠臣の言に随て、道理に任せて帝道を行也」とあつて、道理に任せて帝道を行うことが説かれており、世間においても道理に任せることの重要性が示されている。

随7にも、「又、冥機冥応、顕機顕応等の四句有る事を可思。又、現生後報等の三時業の事も有り。此等の道理、能可学也」とあつて、「冥機冥応」という見えない場所でしたことが（冥機）、見えない場所において報いられている（冥応）とう考え方は慈円の「目に見えない神仏の世界」を想定しているので共通する考え方である。さらに三時業の道理を考えるべき事が記されている。

随8にも、「諸天善神及三宝の冥に知見する处を不愧、人に貴られんと思ふ心を誠る也。只、臨時、触事、為興法為利生、諸事を斟酌すべき也。擬して後、言、思て後、行じて、率暴なる事勿れと也。所詮は、一切の事に臨で、可

案道理也。念々に不留、日々に遷流して、無常迅速なる事、眼前の道理なり。（中略）如是の事も、臨時触事、思量道理、不思人目、忘自益、仏道利生の方によき様に可計」とあつて、「諸天善神及三宝の冥に知見する処」の存在を随17には、「世情の見をすべて忘て、只、道理に任て、学道すべきなり」とあつて、世間の見解、道理をすべて忘れて仏教の道理に任せて学道すべきことが説かれている。

仏法によつて王法を守るということは慈円と道元両者共通している。しかし、慈円は歴史を考える場合、仏法の道理は抽象的過ぎて有効ではないという。大隅和雄氏は次のように述べている。

しかし、そうした理由とは別に、漢家の年代記の摘要を掲げた後に、日本の歴史に入るといふ順序を採つたのは、慈円が顕の世界の道理の基本は漢家にあり、漢家の道理は日本の歴史を超えた普遍的、世界的なものであると考えていたためであるように思われる。

漢家とは別に、仏法の道理についても、

滅罪生善トイフ道理、遮惡持善トイフ道理、諸惡莫作、諸善奉行トイフ仏説ノキ　ラキラトシテ、諸仏菩薩ノ利生方便トイフモノノ一定マタルナリ。（卷七）

というように、言及しているが、仏法の道理は普遍的でありすぎ、その抽象的な理法は、世間の在り方を論ずるための具体性を持ち得ず、歴史を考えるのに有効なものとは考えられていない。⁽⁴⁰⁾

愚42を引用し仏法の道理を示しているが、世間の在り方や歴史を考えるのに有効ではないと慈円は考えていたことを指摘している。

国により道理が異なる——日本は小国——

次に、慈円は国により道理が異なると記している。その前提として、慈円と道元との共通の見解として、日本は中

国などに比べて小国であるという認識をもっていた。

道元は「この日本国は、海外の遠方なり。人のこころ至愚なり」（「谿声山色」）や「小国辺地」（「四禅比丘」）と記しているように、日本はインドや中国とは異なり、土地に関しては小国僻地であり劣っていると考えていた。筆者は、道元の四輪観について考察したことがある。四輪とは、①良い土地に住み、②良い人に親しみ、③良い願いをもち、④過去世に良い行いをしたことの四つである。その結果、「その参学過程において国土や師に恵まれないう状況にあったが、誓願と宿善とにより四輪すべてを叶え、正法に見えたのである」という結論を得た。⁴¹⁾

慈円も日本は小国という見解は有していた。大隅和雄氏は『愚管抄』巻三を挙げ次のように述べている。

日本国小国也、内覧ノ臣二人ナラビテハ一定アシカルベシ、ソノ中ニ大神宮鹿島ノ御一諾ハ、スエマデタガウベキコトニアラズ、大織冠ノ御アトヲフカクマモラムトテ、時平ノ讒口ニワザト入テ御身ヲウシナヒテ、シカモ撰録ノ家ヲモラセ給ナリ。

という所がある。化現の人である菅原道真は、大きな国である漢家であれば代々の帝王に複数の臣が仕えるのは常のことであるが、日本国は小国なのだから補佐の臣が二人並ぶのはよくない。⁴²⁾

日本は中国とは異なり小国であるが故に、統治方法が異なると論じている。大隅和雄氏は次のようにも述べている。

『愚管抄』における「漢家」と「日本国」とをめぐる論は、普遍的な「漢家」に対して、「日本国」は小さく劣った国として自覚されながら、小さく劣ってはいても、日本国には絶対に変わるものがない、特殊な道理があるという主張に繋がっている。慈円のいう大原則から外れた特殊な道理は、鎌倉時代の半ばを過ぎる頃から唯一日本のみに伝わる正理と説かれるようになり、神国思想として行くことになる。⁴³⁾

日本は小さく劣っている、中国にはない特殊な論理がある。それは天皇を補佐する臣は藤原氏独り、中でも九条師輔の子孫からであることを歴史の道理が示しているというのである。九条流藤原氏の流れをくむ慈円の立場を正当化す

る説である。

以上から、慈円と道元は日本は小国であり劣っていると考えているは共通である。しかし、慈円にとっては歴史的に日本には特殊な独自の道理があることを示すものであり、道元は仏教的に日本は劣っているが、宿殖善根により正伝の仏法に見えることができたことを示すものである。

七 道理の意味

道理とは辞書には、「①物事のそうあるべきすじみち。ことわり。②人の行うべき正しい道。道義」とある。⁽⁴⁵⁾大隅和雄氏による和訳『愚管抄全現代語訳』の補注(13)には道理について詳しく解説が示されている。

道理ということばは、一般には物の筋道、理屈という意味で用いられ、人の行なうべき正しい道という意味で用いられることも多い。『愚管抄』が書かれた当時、道理ということばは広く用いられ、書状や古文書のなかでもしばしば使用された。ところで、仏教では、物事が存在し、変化してゆくうえで準拠している法則を道理ということばでとらえている。『瑜伽論』卷三十の説くところによると、道理というものには、相待道理・作用道理・成就道理・法爾道理という四つの種類があるという。相待道理というのは相対的なかたちで存在する道理であり、作用道理は因果の関係として、存在するものとその変化を規制してゆく道理をいい、成就道理という場合は物事を確認してゆくその仕方のある方を決定する道理をさす。法爾道理はあるがままで本性そのものを具現するという道理のことをいう。『愚管抄』の中で慈円は当時常用されていた道理ということばを用いて、歴史の推移を考えようとしたのであるが、そこでは道理ということばが明確な規定をされないままで多義的に用いられている。『愚管抄』の道理は、まず第一に「御孝養アルベキ道理」「道理トイウフモノハナキ」というように、人の行うべき正しい道という道徳的な意味に用いられる。そして第二に、「タダ一スズノ道理

ト云事ノ侍ヲ書置侍リタル也」「世ノ移リ行道理ノ一通リヲ書ケリ」というように、筋道・理屈という意味で使用されるのである。第三に筋道・理屈というものをもう少し具体的に把握して因果の道理が説かれる。「世二因果ノ道理ト云物ヲヒシトヲキツレバ」といい、さらに「コノ怨霊モ何モタダ道理ヲウル方ノコウタウル事ニテ侍ナリ」という場合がそれである。ところが、「一切ノ法ハタダ道理ト云二字ガモツ也」として、すべてに道理を認めるのみでは、人間の判断や行動の基準は明らかにならない。そこで第四に、様々の道理が競合する場合には、道理の軽重を選択しなければならぬ。それは道理というものの相対的な把握のうえに立つて、これをこえる道理、つまり一つの社会を支えている基本的な道理をよりどころにすることが必要である。

「仏法王法マモラルベキ道理」「コレ又臣下出クベキ道理也」というように説かれている場合がそれである。

第五に、そうした道理は世の移り変りに従って変化してゆくという道理がある。ここでは世を支えている道理も、もう一つ外側から相対化されているわけで、「ウツリマカル道理」「何事モサダメナキ道理」ということが説かれることになる。慈円は、日常的な道理のほかに歴史の推移を見ようとしたのであるが、仏教的な道理の考え方をとり入れることによって道理の相対化に成功したといえよう。道理の用語例はさらに再分類することも可能であるが、他面では複合的な意味を持つ場合も多く、訳文ではあえて他のことばに置きかえることをせず、道理はすべてもとのままにとどめた。⁽⁴⁶⁾

右記の記述によれば、仏教における道理は「物事が存在し、変化してゆくうえで準拠している法則」を意味し、特に『瑜伽師地論』などでは四種道理として定義をはっきりさせていることを指摘している。⁽⁴⁷⁾

これに対して、慈円における道理は「明確な規定をされないまま多義的に用いられている」として、大隅氏はこれを五つに分類している。

- ①人の行すべき正しい道という道徳的な意味。

②筋道・理屈という意味で使用。

③筋道・理屈というものをもう少し具体的に把握して因果の道理が説かれる。

④道理というものの相対的な把握のうえに立つて、これをこえる道理、つまり一つの社会を支えている基本的な道理。

⑤世を支えている道理も、もう一つ外側から相対化される道理。

そして、慈円の道理はさらに再分類可能であり、複合的な意味をもつとされるが、これは仏教の道理に影響されたものと論じられている。

仏教における道理は、存在の法則、真理を示す場合が多い。例えば、『テラガータ』には、次のような文がある。

71 きわめて微細、微妙な道理を見、思慮に巧みで、謙虚であり、仏につかえるのを習いとした者には、安らぎ（ニルヴァーナ）は決して得難いものではない。⁽⁴⁸⁾

同じ文が他の箇所にも見られる。

210 いとも微細で靈妙である道理を見、思考に巧みであり、態度が謙虚であり、ブッダに仕えた習性のある人は、安らぎ（ニルヴァーナ）を得ることは困難ではない。⁽⁴⁹⁾

中村元氏は *artha* (*artha*) を道理と訳している。水野弘元『パリ語辞典』は「最極微妙の義」と訳すが、これは悟りの内容である法、真理が微細で見難いことを意味する。

『テラガータ』にはその他、

291 ゆっくりしていてよい時に急ぎ、急がねばならぬときにゆっくりする愚人は、正しい道理によつて処置することができないので、苦しみを受ける。⁽⁵⁰⁾

中村元氏はayonisoを道理と訳している。水野弘元『パーリ語辞典』は「非如理」と訳す。

さて、仏教の道理に影響を受けた慈円は道理に多くの意味を持たせた。小堀桂一郎氏は次のように示している。

慈円は我が国の歴史の根幹を成す最大の脈絡を肇国以来皇位継承の大事が正しく行はれてきた事に在ると見る。その「正しさ」の根拠が「道理」である。慈円の時代の当今第八十四代順徳天皇に至る迄にも皇統に乱脈を来しかねない危機的状况は幾度か生じた。然しその度毎に不思議な叡知の働きが現れて危急を救ひ、万世一系の皇統のあるべき姿を守り抜いた。その叡知は何処に由来するか。それは人々が危急を切り抜けるべき手段としての「道理」の在所を知り、道理の推す所に従つて事態に対処し身の進退を決したからである⁽⁵¹⁾。

ここには、「正しさの根拠」としての道理と「手段」としての道理が挙げられているが、道理の意味も様々にある。以下、ルールの意味としての道理、理由の意味としての道理、真理の意味としての道理、手段の意味としての道理に筆者が分類した当該箇所を列挙する。

規則として

愚9には、「國王御子ナクバ孫子ヲモチイルベシト云道理イデキヌ」とあつて、皇位継承に関して、成務天皇までは國王は一人で世を治めていたが、仲哀天皇から、國王に御子がない場合には、孫にあたる御子を皇位につけてもよいという道理があらわれたと記されている。つまり、ここでは皇位継承の「規則、定め」を道理と言う。

愚10にも、皇位継承に関して「コレハ何事モサダメナキ道理ヲ。ヤウヤウアラハサレケルナルベシ。男女ニヨラズ天性ノ器量ヲサキトスベキ道理」とあつて、「何ごとにも決まりはないという道理」、「男女の性別よりも天性の才能を第一に考えるべきであるという道理」とは、まさしく「規則、きまり」と解される。

愚11には、「其眉輪モ七歳ノ人ナリ。マヽコニテヤヤノ敵ナレバ道理モアザヤカナリ」とあつて、親の仇を討つと

いう道理、つまりルールとしての道理が記されている。

愚22には、「ツイニ大入道下ノハサウナキ道理ニテ攝籙ニナラレニケレバ」とあつて、一条天皇の即位とともについに大入道殿（兼家）が文句のない道理によつて摂政におなりになったことが記されている。つまり、道理とは正しいやり方を意味する。

愚24には、「カナラズカナラズ執政ノ臣ナルベキ道理」とあつて、摂政の家に天皇の母方の祖父や伯父である大臣があれば、その人がかならず執政の臣となるべきであるという道理、つまり、規則としての道理。

愚33には、「例モ道理モハベカルマジケレバ」とあつて、「例もあるし道理にはずれることもなからう」、道理とは先例、つまり、規則の意味。

愚38には、「世中ノ道理ノ次第ニツクリカヘラレテ。世ヲマモリ人ヲモル事ヲ申侍ナルベシ」とあつて、世の中の道理が順次作りかえられながら世の中をささえ、人間を守っている、つまり、世の中の道理は変化する。規則は時代によつて変化する。法律や憲法や国連決議案などのルールを作る事により、世界の平和を築き人類の安寧が守られることを意味していると思われる。

愚39には、「代々ノウツリユク道理ヲバ」とあつて、道理というものが時代とともに変化していくこと、ここでも道理が変化。

愚41には、「カ、ル道理ヲツクリカヘツクリカヘシテ」とあつて、規則としての道理が作りかえ作りかえされる。

理由として

愚14には「道リノヲサルナリ」とあつて、大隈氏が「理由があるのである」と訳しているように、理由としての道理。

正34には、「この道理、しづかに思量功夫すべし」とあつて、商那和修の衣が、在家の時は俗服であつたが、出家すれば袈裟となるという道理を思量功夫すべきことが記されている。この場合は俗服から袈裟に変化した理由と取ることが出来る。

正46には、「しかあれば、臨済宗と称すべからざる道理、あきらけし」とあつて、臨済宗と称すべきでない理由としての道理が記されている。

正52には、「在家心と出家心と一等なり、といふこと、証拠といひ、道理といひ、五千余軸の文にみえず」とあつて、証拠と直前にあつて理由としての道理が記されている。

随4には、「文筆詩歌等、其詮なき也。捨べき道理、左右に及ばず」とあつて、仏道には文筆詩歌等は不要であり捨てるべき道理は議論の余地がないことが記されている。

真理として

愚18には、「コノ道理ヲヒシトココロウルマヘニハ。一切ノ事ノ證據ハミナカクノミ侍ナリ。盛者必衰會者定離トイフコトハリハコレニテ侍ナリ」とあつて、「盛者必衰會者定離」の道理が説かれている。

愚19には、「母ヲヤシナイウヤマヒスベキ道リノアラハル、ニテ侍ナリ」とあつて、母を敬うべき道理が説かれている。

愚32には、「三世ニ因果ノ道理ト云物ヲヒシトヲキツレバ。ソノ道理ト法爾ノ時運トノモトヨリヒシトツクリ合セラレテ」とあつて、三世因果の道理、法爾の時運とが対比的に記されている。また、「漢家ノ聖人ト云孔子。老子ヨリハジメテ。皆コノ定ニカネテ云アツル也」とあつて、中国の聖人である孔子や老子にはじまるすぐれた人々は、みなこの真理を理解して、前もつてものごとくなりゆきをいい当てたと記されている。

愚36には、「邪正ノコトハリ善惡ノ道理ヲワキマヘテ。末代ノ道理ニ叶ヒテ」とあつて、邪と正との道理、善と惡との道理、末代の道理が記されている。

愚42には「内外典ニ滅罪生善トイフ道理。遮惡持善トイフ道理。諸惡莫作。諸善奉行トイフ佛說ノ」とあつて、「滅罪生善」「諸惡莫作諸善奉行」という仏教の教理、真理が説かれている。また、「カナハデカクヲチクダル也」とあつて、世の中はしだいに落ち衰えていくのであるという記述は末法思想の影響も考えられる。

道元の道理に関して、佐久間賢祐氏は、『正法眼藏』「現成公案」「仏性」「身心学道」「行仏威儀」「二顆明珠」の巻から「道理」の語句を抽出、考察した結果左記のように述べている。

このように『正法眼藏』における道元禪師の道理は、「われ」の道理、自己が仏法を転ずる道理とは対極にある道理であり、現にあるすべての存在が、そのさながらの儘にかけがえなき絶対の完結相としてある事実、縁起空・縁起現成のいのち存在としてかけがえのない絶対の眞実、仏のいのちそのものとして在りえている普遍的なはたらきの事実を「道理」としている。⁽³²⁾

佐久間氏の述べている「普遍的なはたらきの事実」とはこの項目の「真理としての道理」と同義と思う。

正1には、「万法のわれにあらぬ道理」とあつて、仏教の三法印でもある「無我の道理」が記されている。

正2には、「いまだところとしていたらずといふことなき道理」、「無廻不周底の道理」とあつて、仏法のハタラキが全てに行きわたっている道理、真理が記されている。また、ここでは、…底の道理とあつて公案の道理と見なすことができる。

正3には、「おほよそ仏性の道理、あきらむる先達すくなし」とあつて、仏性の道理が記されている。

正4には、「未散、といふは、いかなる道理かある」とあつて、風火未散という言語から道理を見出すべきことが記されている。公案の中に、言語の中に更に真理があるという思想。

正5には、四生には四死あるべきか、又、三死二死あるべきか、又、五死六死、千死万死あるべきか。この道理、わづかに疑著せんも、参学の分なり。しばらく功夫すべし、この四生衆類のなかに、生はありて死なきものあるべしや」とあつて、仏教における生物の分類方法で、その出生方法によつて四種に分類したものである、胎生・卵生・湿生・化生に関して、どのような道理があるか擬著・参学・功夫すべきことが説かれている。

正6には、「しばらく雪峰のいふ三世諸仏、在火焰裡、転大法輪といふ、この道理ならふべし」とあつて、雪峰義存の「三世諸仏、在火焰裡、転大法輪」という言葉に道理を見いだしている。

正8には「坐禅の作仏を待つに非ざる道理」とあつて、坐禅は作仏を待つものではない、つまり、修証一如が記されている。

正10には、「一盲引衆盲の道理は、さらに一盲引一盲なり、衆盲引衆盲」とあつて、一盲引衆盲という愚者が他の多くの愚者を導きて誤らしむる語に対して、さらに参究している。

正11には、「諸仏道の翳眼空華の道理、いまだ凡夫・外道の所見にあらざるなり」とあつて、凡夫・外道には諸仏如來の道理は分らない。つまり、道理には様々なレベルがあることが示されている。

正13には、「いまだこの道理にいたらずば、いたづらの功夫なり」とあつて、道理にいたらなければ、無意味な功夫であるとする。つまり、功夫参究を続けて行きある正しい答えを見出すべきことを示している。

正15には、「さらに道著の道理あるなり」とあつて、公案の道理をしづかに参究することによつて現成するが、さらなる道理を参究しなければならないことが記されている。向上し続ける。

正16にも、「さらに道理あり」とあつて、正15と同じである。

正18には、「道理現成するなり」とあつて、参究することにより道理が現成することが記されている。

正44には、「仏法の道理にあらず」とあつて、説心説性が仏法の道理である、すなわち、真実であることを示して

いる。

正67には、「因果の道理は、孔子、老子等のあきらむるところにあらず」とあつて、因果の道理という仏教の真理を示し、それは孔子や老子の明らかにするところではないという。

随5には、「此道理を聞て後、昼夜定坐して」とあつて、「今祖席に相伝して専する処は坐禅也」という真理を聞いて後は昼夜に坐禅したことが記されている。

随11には、「此道理、真実なれば、仏も是を衆生の為に説き、祖師の普説法語にも、此道理をのみ説く」とあつて、「無常」という真理、真実を説いている。

随13には、「真実報恩者の道理、何ぞ不叶仏意哉」とあつて、「真実報恩者」の道理に叶うかどうか問題とされている。

随15には、「道理を得て後には、此国の大師等は、土かわらのごとく覺て、従来の身心皆改ぬ」とあつて、道理を得ることが重要であり、真理を悟ることであると思う。そして、それには思う、考えることが必要である。

伝2には、「慙麼の道理を護持保任する故に」とあつて、真理を守って生きていくことが記されている。

手段として

愚26には「カヤウノコトハ道理キハマリテ」とあつて、粟田殿は花山天皇に道理のある限りをつくして出家させた。花山天皇は最愛の妃に死なれ、絶望して出家を望んでいた。兼家の三男道兼（粟田殿）は、一緒に出家しようと花山天皇を誘い、深夜宮中を抜け出した。寺に着き、花山天皇が出家すると、道兼は「今一度だけ、この出家前の姿を父に見せてきます」と言つて逃げ出した。このとき初めて、花山天皇は兼家、道兼父子の陰謀で、自分が出家させられたのだということに気がついた。つまり、ここでの道理は手段の意味がある。

愚43には、「ツクリカタメタル道理ヲアラハス道ハアルマジキ也」とあって、高貴の人でも下賤の者も、運命によって定められた寿命以上に、命を長くするような道理をつくりかため、それを実現する手だてを持っているはずがないとある。つまり、寿命は運命によって決まっているから、寿命を長くする道理はないという。手段としての道理が説かれている。この考え方は道教の仙薬などの考えを否定するものか。

道理に関わる動詞表現

それでは道理に対してどのように対応すべきかを動詞の表現によって見てみたい。

『愚管抄』

愚1 「道理ヲ詮トセリ」。訳は「明らかにし」。

愚5 「道理ヲワキマフル」。訳は「理解する」。

愚7 「道理ヲノミオモヒツゞケテ」。

愚8 「道理ニソムク心」。

愚10 「コノ道理ヲ又カクシモサトル人ナシ」。訳は「悟る」。

愚11 「道理モアザヤカナリ」。

愚19 「道リノアラハルヽニテ待ナリ」。

愚20 「道リノアラハルヽナリ」。

愚23 「道理ノユクトコロ」。

愚26 「道理キハマリテ」。

愚27 「道理ノイタリヨモ」。

愚 32 「三世二因果ノ道理ト云物ヲヒシトヲキツレバ」。

愚 35 「道理ニカナイテ」。

愚 36 「道理ニ叶ヒテ」。

愚 40 「道理ノウツリユク」。

愚 41 「道理ヲツクリカヘツクリカヘシテ」。

愚 42 「道リノカハリユク」。

『正法眼蔵』

正 1 「道理あきらけし」。

正 3 「道理よくよく参究功夫すべし」。

正 5 「道理、わづかに疑著せんも」。

正 6 「道理ならふべし」。

正 7 「道理もあらはるべし」。

正 12 「道理を覚了せざる」。

正 13 「道理にいたらずば」。

正 14 「道理をはづべきなり」。

正 22 「道理、あきらかに参究すべし」。

正 25 「道理現成する」。

正 28 「道理、子細に檢点すべし」。

- 正 30 「道理、よくよく参学すべし」。
- 正 31 「道理を功夫参究すべし」。
- 正 32 「道理、功夫参学すべし」。
- 正 33 「道理をしる」。
- 正 34 「道理、しづかに思量功夫すべし」。
- 正 35 「道理、よくよく参究すべし」。
- 正 36 「道理をも参学すべし」。
- 正 38 「道理、しづかに功夫参究して」。
- 正 43 「道理現成する」。
- 正 45 「道理を参学せざる」。
- 正 46 「道理、あきらけし」。
- 正 47 「道理、しづかに思惟すべし、卒爾にすることなかれ」。
- 正 48 「道理を、かつて見聞せず、参学なき」。
- 正 49 「道理を思量すべし」。
- 正 50 「道理、よくよくこころをとめて参学究尽すべし」。
- 正 51 「道理を拈来して」。
- 正 54 「道理、かならず一定すべし」。
- 正 55 「道理、よくよく決定すべし」。
- 正 56 「道理をしらず、あきらめずして」

- 正 59 「道理を信受する」。
- 正 60 「道理、あきらかに観見し、決断し、照了し、警察すべきなり」。
- 正 61 「道理を信ずるなり」。
- 正 62 「道理をわすることなかれ」。
- 正 65 「道理を明らめず」。
- 正 66 「因果の道理を明らむべし」。
- 正 68 「道理、あきらめしるべし」。

『随聞記』

- 随 2 「道理に任せて」。
- 随 5 「道理を聞て後」。
- 随 6 「道理に順ずる」。
- 随 8 「道理にたがう」。「思量道理」。
- 随 10 「道理を心ろ得てゆかば」。
- 随 11 「道理を思ふ事」。
- 随 15 「道理をかんがふれば」。
- 随 16 「道理を案じて」。
- 随 17 「道理に任て」。
- 随 19 「道理を得て」。

随 20 「道理にかなふ」。

『伝光録』

伝 2 「道理を護持保任する」。

伝 3 「道理を見得する時」。

伝 4 「道理を得ること」。

伝 5 「道理に達せず」。

伝 6 「道理に契はず」。

伝 7 「道理に相応する」。

伝 8 「道理を注脚し去ん」。

伝 9 「道理を通じ得てん」。

伝 10 「道理を説取せん」。

伝 11 「道理を通じ得る」。

伝 12 「道理を会する」。

伝 13 「道理、如何が露はし得んや」。

伝 14 「道理を通ずることを得ん」。

伝 15 「道理を通ぜん」。

伝 16 「道理を少分も通ずることを得ん」。

右記を考察すれば、慈円と道元の共通点としては、「道理を明らかにする」、「道理が現れる」ことが表現として一致する。「道理が現れる」ことを道元は「道理現成」とも表現している。

慈円の「道理に至る」という表現は、道元の「道理決定す」、「道理一定す」、「道理決断す」という表現と同じであると思われる。また、慈円の「道理に叶う」という表現は、道元の「道理に順ずる」、「道理に違う」（反対の意味として）という表現と同じと思われる。

異なる点は、「因果の道理」に対して、慈円は「ひとときつ（しつかりと照らしあわせる）」とするが、道元は因果の道理を「明らかにする」と表現している。慈円のみに見られる表現に「道理を作りかえる」という表現がある。

道元のみ表現は、「道理を参究功夫する」、或いは「思量功夫」「参学功夫」することである。これは禅に特有の語句であろう。⁽³³⁾ また、「道理を信受する」、「道理を信ずるなり」という表現は道元に特有であるが、十二巻本のみに見出される。つまり、十二巻本では、道理は真理、教理として現前にあり、それを探ることから信じることにへと変化しているように思う。

瑩山に特徴的な表現は「道理を見得する」、「道理を通じ得ん」、「道理を通じ得ん」、「道理を通ぜん」などが挙げられる。瑩山禅師は「道理に通ずる」という表現を好む。

おわりに

長く生きてみると、今まで見えなかった物事が見えてくることもあるし、年を取ると現象の背後にある何かを見出したくなる。慈円は次のように述べている（『愚管抄』7）。

トシニソヘ日ニソヘテハ。物ノ道理ヲノミオモヒツゞケテ。老ノネザメヲモナグサメツゝ。イトゞ年モカタブキマカルマヽニハ。世ノ中モヒサシクミテ侍レバ。ムカシヨリウツリマカル道理モアハレニオボエテ。

丸山二郎校注『愚管抄』一九九七年、岩波書店、八九頁

晩年の慈円は自己の終焉を感じ、久しく見てきた世間の道理の移り変わりを考え続け、それらを『愚管抄』に記したのである。

反対に、道理を見出そうと欲してくるのは年取った証拠であろうか。本多静六氏の本の一節に「もはや前途に影の薄い老人になると書画、骨董…なんでも古い物を好む欲望も出てくる」とあったが、年取ることによって生じる欲望や考え方があると思う。年取った者が、「昔は良かった、近頃の若い者は…」と懐古的に思うのは世の常である。

さて、慈円と道元の関係に関しては、接点が多く見出される。両者ともに名門の生まれであり社会的、政治的に最高の地位にいた一門の出身である。慈円は摂関家に生まれ、関白藤原忠通の子。兄弟には近衛基実や松殿基房や九条兼実など実力者がいた。

道元は京都の貴族の名門に生まれた。従来の説では父は内大臣源通親、母は関白太政大臣藤原基房の娘であるとされる。現在は通親の子通具の説が強いが、父母に関して不明な点が多い。中尾良信氏は次のように述べている。

この「出自・出生」に関する議論は、なお結論をみたとはいえず、わずかに判明していることは、道元が村上源氏の家系であること、藤原基房と血縁か、もしくはそれに近い関係にあるかも知れないこと程度であり、いづれにしても道元の母は正室と呼ばれる女性ではなかった、という推測だけが一致した見解となっている⁽⁵⁴⁾。

また、慈円は、九条兼実とは同母兄であるが、松殿基房とは異母兄にあたる。慈円は兼実の庇護を受け、兼実失脚に関して『愚管抄』では源通親を非難している。このことは、世俗の関係を持ち込めば慈円と道元とは敵対関係にある。慈円は四度天台座主に就任しているが、座主在任中に道元を得度させていない。公円は天台座主にわずかに在位十ヶ月と短期間であったが、その期間に道元は公円より得度を受けている。公円は慈円の弟子ではあるが、慈円は道

元に敵対意識を持つているが故に、得度を授けなかったのではなからうか。さらに、通親と基房とは義兄弟の関係であったとされるから、慈円は異母兄である基房を快く思っていなかったかもしれない。

次に、慈円と道元との考え方の共通点は、現象の背後にある見えない存在である「道理」を認め、それを明らかにしていこうとする態度である。慈円も道元も道理は複数あると考えている。さらに、慈円の道理は複雑であり、道理には軽重があり、さらに時代によって変化するものであると捉えている。道理の中に道理があるとして複合的、重層的な意味をもたせている。

両者の相違点は、道理を探る対象である。慈円は歴史や政治の中に道理を探るが、道元は仏典、禅籍が中心であり、仏祖の言葉の中の道理を参究功夫することを重視とする。道元自身の参究功夫の表れが『正法眼蔵』であり、その中で参究方法も詳しく説示する⁽⁵⁶⁾。

また、道元は道理に次第、レベルを設けているように思う。そのことを、「甲とのみしりて、乙と知らず」などという表現で随所に記している。⁽⁵⁷⁾しかし、そのレベルは甲が悪くて、乙が良いというものではないと思う。例えば、道元は入宋以前は、典座よりも坐禅や学問を重視していたが(甲)、老典座に出会ってから典座の重要性を知った(乙)という。同様に、釈尊の伝記には、釈尊が開悟の直後、説法しても人々にとって理解し難いからやめようとしたが(甲)、梵天勧請によって法輪を転じた(乙)ことが記されている。このような二つのエピソードなども、甲の道理が悪くて、乙の道理が良いとは言えないであろう。より高次の次元からは劣った道理とされるだけである。

次に、道理の究明はいつ誰がするのであろうか。慈円は、『愚管抄』において仮名文字で書いた理由を、人夫や宿直の番人など物事を知らない人々にも理解させるために書いたと記している。或いは、討幕計画を立てる後鳥羽上皇と、それを取り巻く政治家達であらうか。

これに対して道元は、『随聞記』に「学人(仏道修行者)は静かに坐して道理を考えるべきこと」が記されてい

る。対象は学人であり、静かに坐すとあるから、坐禅中であろうか。『正法眼蔵』『三十七品菩提分法』には、

いはゆる、正業は僧業なり、論師・経師のしるところにあらず。僧業といふは、雲堂裏の功夫なり、仏殿裏の礼拝なり、後架裏の洗面なり。

『正法眼蔵』『三十七品菩提分法』

とあつて、雲堂における功夫という言葉も見出される。坐中における参究功夫は、現今の曹洞宗ではほとんど行われていないが、瑩山禅師は、坐禅の目的を「心地を開明し、本分に安住せしむ」「本来の面目をあらわす」「本地の風光を現す」と表現し、「本来の自己」に目覚めることとする。また、坐禅中の心得として心が散ずる時は、「須一則公案提撕举覚」（「坐禅用心記」『常済大師全集』二四九頁）とあつて、公案の参究も認めている。

その他、慈円は国によって道理が異なると記し、日本は中国に比べ小国であるが、中国とは異なる道理があるとす

る。日本が小国であるという意識は道元にもある。

それでは、道理に従い、道理を明らかにしようとするのは何故か。将棋や囲碁には勝つための定石がある。これは上達すればするほど見えてくるという。碁盤の奥底に見える定石があるように、歴史の中に潜む道理も見いださなければならぬのか。将棋は勝つために道理を見出すが、何の為に見出すのか。人生の勝ち組になるためか。そうではない。

小堀桂一郎氏は次のように述べている。

「道理」は人間の歴史を超越的な高みから支配してゐる原理には違ひないのだが、それは支那人の担ぐ天命やキリスト教の奉ずる造物主の意志の如き不可抗力としての運命ではなく、人間が「道理」の所在を洞察し、その顕現の方向に向かって努力することによって、一見不可抗力と映ずる運命の支配に修正を加え、歴史の形成に寄与することが可能である様な行動原理であり、人間の実践道徳と結びついた、実現目標としての

理想なのである。⁽⁵⁸⁾

道理を「人間の実践道徳と結びついた、実現目標としての理想」と見なしている。

倉沢幸久氏は慈円に関して次のように述べている。

そのような道理に従う心を持つこと、道理によつて心が澄まされること、あるいは心を澄まして道理を明らかに悟ること、それが結局めざしたものは、穏しい乱れない世の中であつた。⁽⁵⁹⁾

「穏しい乱れない世の中」、つまり、平和な世の中を目指していたという。これは、摂関家の出身である慈円が、摂関家の維持を願つたものであろう。兄兼実は失脚するが、その後、九条家からは、一条家、二条家などが輩出し、戦前まで公家として繁栄していた。

慈円によれば、道理は歴史のなかで時代によつて変化し、国によつても異なっているという。さらに、「道理」の変化を導く、言わば大きな「道理」がその根柢に働いているという極めて複合的なものである。さらに、意味も一つではなく多義的である。

道元は、道理を参究功夫し、それによつて道理が現成するという。これは仏教の真理と言つて良いと思う。このことは瑩山にも通し、『伝光録』の各章の最後部は道理の提示で終わる。つまり、「真理を知りたいか」と問うて、真理を説くという形式である。それでは、仏教の目標である真理を知る、明らかにするにはどうすれば良いか。道元は何度も我が身に引き当てて道理を考えることが大切であるという。随11「返々も、此道理を、心に忘れずして、只、今日今時許と思つて、時光を失はず、学道に心を入る可也」。また、随10には、仏教経典を読む際の心得として、対句韵声などを見て善し悪しを心に思うのではなく、「理」「道理」を心得ることが重要と記されている。随20には、「只、時にのぞみて、ともかくも、道理にかなふやうに、はからふべき也」とあつて、道理にかなうかどうか最も重要であり、道理にかなうように考えて取りはからうべきであると示している。しかし、「道理を以て道に、人、僻

事を言を、理を改て言勝はしき也」(『随聞記』2、七卷七一頁)とあり、自分に道理があると思っても言い負かしたり、逆に負けて引き下がってもならないという。これは相手を怒らせないという立場(道理)を優先するものである。

今後の課題として、慈円の「道理」がはたしてどこから由来しているのかである。道教や天台本覚思想の影響はなのか。⁽⁶⁰⁾

最後に、慈円は若い時に比叡山を下り、兄の九条兼実のもとに赴いて「遁世したい」ということを申し出たが、兼実に思い止まるように説得されたという。隠棲への思いはあつたが、摂関家出身としてその大任を任され、結局は比叡山に残り四度も天台座主に就任することになる。これに対して、道元は比叡山を下り禅門に向かった。山に残った慈円、山を下りた道元それぞれの道は異なるが、それぞれが「道理」を求めた人生であつた。

註

- (1) 拙稿「道元禅師がお望みになること―チベット「認識論」との比較を通じて―」(一九九六年、『曹洞宗研究員研究紀要』第二七号)。
- (2) 末本文美士『日本仏教史―思想史としてのアプローチ―』一九九六年、新潮社、二二〇頁。
- (3) 小堀桂一郎「慈円が拓いた「道理の世紀」」(『文藝春秋』八七号、二〇〇九年六月、三二一頁)。
- (4) 私事であるが、二〇〇八年より鶴見大学に奉職し、二〇一一年より養国寺の代表役員に就任した。共に大本山総持寺系統に属することは誠に不思議なご縁と感じている。
- (5) 多賀宗準『慈円』一九五九年、吉川弘文館、九頁。

- (6) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、五頁。
- (7) 菅原研州『道元禪師伝』二〇一一年、曹洞宗宗務庁、二五頁。
- (8) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一三頁。
- (9) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、二五頁。
- (10) 中世古祥道『新道元禪師伝研究』二〇〇二年、国書刊行会、六頁。
- (11) 中世古祥道『新道元禪師伝研究』二〇〇二年、国書刊行会、一五頁。
- (12) 大久保道舟『俗系の研究』（『道元思想大系』1伝記篇第一巻―道元の生涯1―一九九五年、同朋社、一七五―一七六頁）や守屋茂『道元の親父・育父について―親父久我通親説は妥当―』（『道元思想大系』1伝記篇第一巻―道元の生涯1―一九九五年、二五四頁）などには源通親説を採用する。
- (13) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一〇五頁。
- (14) 建久八年―正治元年（一一九七―一一九九）慈円四十三歳から四十五歳、九条家失意次代はまた慈円の閑居・静観の時代であった。（中略）通親は、源博陸（関白の唐名）と綽名され、外祖の威をかりて天下を独歩すると評せられた（多賀宗準『慈円』一九五九年、吉川弘文館、七八頁）。
- (15) 建久七年（一一九六）十一月、慈円は四十二歳を以て座主・護持僧・権僧正等の職位を辞して籠居した。その直接原因は摂政兼実の失脚にあり、中宮任子（宜秋門院）も宮中を退出され、九条家の勢力は廟堂から一掃された。大納言源通親及び後白河院の寵姫丹後局等の政敵の運動が功を奏して、ここに摂政は前関白近衛基通にうつり、通親が背後にあつて実権を握った（多賀宗準『慈円』一九五九年、吉川弘文館、頁、七〇頁）。
- (16) 角田泰隆編『別冊太陽 道元―いま、此処、このわたしを生きる―』二〇一二年、平凡社、二七頁。
- (17) 良顕法眼と承円を同一人物とする説があるが、中世古氏は否定している。中世古祥道『新道元禪師伝研究』二〇〇二年、国書刊行会、六二頁。
- (18) 館隆志『三井寺の公胤について（上）―法然・栄西・道元・公暁と関わった天台僧―』（『駒澤大学仏教学部論集』三七号、平成一八年、三三八頁）。

- (19) 館隆志氏は公胤と采西との関係を明らかにしている。館隆志「三井寺の公胤について（上）」法然・采西・道元・公曉と関わった天台僧——（『駒澤大学仏教学部論集』三七号、平成一八年、三四五頁）。
- (20) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、九七頁。
- (21) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、九〇頁。
- (22) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一一七頁。
- (23) 倉沢幸久「鎌倉時代の『道理』について―慈円・道元・無住―」（大阪大学文学部日本学研究室編『日本学報』第二号、昭和五八年、六九頁）。
- (24) 小堀桂一郎「慈円が拓いた『道理の世紀』」（『文藝春秋』八七号、二〇〇九年六月、三一〇頁）。多賀宗集氏は慈円の道理への端緒について、「観性は仏法興隆を相誓った慈円の同行であったが、さらに重大なことは彼の仏眼信仰が慈円の思想の方向を決した大きな力であり、慈円の『道理』の思想への開眼はそこに端を発しているという点である」と述べている。多賀宗集『慈円』一九五九年、吉川弘文館、八一頁。
- (25) 綏靖天皇は『日本書紀』により第二代と伝えられる天皇。神武天皇の末子。名は神淳名川耳。父の死後、異母兄の手研耳命が綏靖の母と結婚し、さらに王位を奪うために弟たちの殺害を企てた。綏靖は兄と共に逆にこれを討つが、このとき兄は手足がふるえ手研耳命殺害を果たせず、綏靖は一矢で仕留めた。その勇猛ぶりにより、弟ではあるが王位に就いたとされる。
- (26) 第三二代崇峻天皇（？―五九二）は、馬子が大大臣となり国政を左右したので、天皇は馬子を除こうとしたが、逆に馬子が崇峻天皇を東漢駒に命じて暗殺した事件。天皇が殺害されたのは、確定している例では唯一。
- (27) 花山天皇（九六八―一〇〇八）は第六五代天皇。藤原道兼（九六一―九九五）は平安時代中期の公卿。摂政関白太政大臣・藤原兼家の三男。別名粟田殿。藤原兼家が、外孫の懷仁親王（一条天皇）を即位させるために、粟田殿を利用して退位させたとされる事件。
- (28) 多賀宗集『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一四三頁。
- (29) 多賀宗集『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一四四頁。
- (30) 多賀宗集『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一四八頁。

- (31) 多賀宗準『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一四八頁。
- (32) 小堀桂一郎「慈円が拓いた「道理の世紀」」(『文藝春秋』八七号、二〇〇九年六月、三二一頁)。
- (33) 大隅和雄『愚管抄を読む』一九九九年、講談社、六九頁。
- (34) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一一八頁。
- (35) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、二六頁。
- (36) 多賀宗準『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一四九頁。
- (37) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一一八頁。
- (38) 大隅和雄『愚管抄を読む』一九九九年、講談社、七〇―七二頁。
- (39) 多賀宗準『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一四五頁。
- (40) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一三三頁。
- (41) 拙稿「道元禪師の四輪観について」(『宗学研究』二〇〇一年、三〇頁)。
- (42) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一二六頁。
- (43) 大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一三四頁。大隅氏は次のようにも述べている。

中国の王朝で唯一眼目とされることは、国王となる人の器量の一点だけであり、器量が大変すぐれているということが問題にされ、その人が打ち勝って国王になることと定められているのに、この日本国では国の初めから王の血筋が定められており、王の系譜が他に移ることはないというわけである。

大隅和雄『西行・慈円と日本の仏教―通世思想と中世文化―』二〇一六年、吉川弘文館、一二三頁。

- (44) 倉沢幸久氏は、『愚管抄』における「道理」、物事の在り方、成り方を規定し、当然そうあるべきと推論され得るようなすじは、いくつかのレベルを持つ重層的なものであるとして、以下の五つに分けて内容をまとめている。

一、この世界を生長衰退するものと捉える四劫観に基づく「劫初劫末の道理」。それによれば、日本も唐土も天竺をその中に含まれる南閼浮洲、すなわちこの人間の住む世界には盛衰の理があつて、衰えては興り、興つては衰え、このようにして次第に果

てには人壽十歳に減じ果て劫末に至る。又次第に興り始めて果てには人壽八万歳にまで興り上る。「盛者必衰」「会者定離」という理もこのことである。

二、「法爾の様ぬれば力及ばねども、仏法にみな対治の法を説く」と言われる、仏法の道理。それは「滅罪生善」という道理、遮惡持善という道理」等であり、善因には必ず善果が約束されるという救済の道理である。

三、日本の神々が、神話に記されているように定められた道理。仏教がインド・中国・日本の三国に共通であるのに対して、特殊に日本における道理である。

四、「一切の法は道理が持つなり」と言われる、一切の物事の在り方・成り方を道理が規定していると見られる、そのような道理。この場合、歴史に見出される一切の事は前例として、そこに示している。

五、前項で見た一切の法を保つ道理は、世の移り変りにつれて移り変わる、そのような時代に応じて移り変わる道理。このような世の道理が移り行くことを立てることによって、一切の法を道理が持つということが完全になる。あるいは一切の法を道理が持つということの中に、必然の展開として道理が移り行くことが含まれている。

倉沢幸久「鎌倉時代の『道理』について—慈円・道元・無住—」（大阪大学文学部日本学研究室編『日本学報』第二号、昭和五八年、六九—七三頁）。

(45) 『広辞苑』岩波書店、第五版、一八九六頁。

(46) 慈円・大隅和雄訳『愚管抄全現代語訳』二〇一二年、講談社、四三一—四三三頁。

(47) 大隅和雄氏は『瑜伽論』卷三十を挙げ、「相待道理・作用道理・成就道理・法爾道理」の「四種道理」を示しているが、その他の資料を挙げれば、『解深密経』にも四種道理が記されている。

道理者。當知四種。一者觀待道理。二者作用道理。三者證成道理。四者法爾道理。觀待道理者。謂若因若緣能生諸行及起隨說。如是名爲觀待道理。作用道理者。謂若因若緣能得諸法。或能成辦。或復生已作諸業用。如是名爲作用道理。證成道理者。謂若因若緣能令所立所說所標義得成立令正覺悟。如是名爲證成道理。

『国訳一切経』経集部三の脚注には、

『解深密経』卷五（大正一六・七〇九中）

觀待道理。長に対して短を成じ、短に対して長を成する如く、相對背反の一は必ず他に待藉すると言う不變の道理を觀待道理と名く。作用道理。因縁所生の有為法には必ず事業を成弁する作用あるを言う。證成道理。現量・比量・聖教量によりて証明し成立せられたる真正の道理を言う。諸行無常・諸法無我の如し。法爾道理。仏の出世・不出世に關せず元より法界に安住する自爾の道理を言う。例えば地水火風の四大にそれぞれ堅濕軟動の性あるが如く、又善因によりて樂果を招き惡因によりて苦果を招くが如し。

『国訳一切經』經集部三、一一五

頁

と解説している。この中、證成道理は、「諸行無常」「諸法無我」など法印が例として挙げられているが、これは仏教の真理といえよう。

『瑜伽師地論』卷二五には「思正法」に關する箇所に四種道理が細かく記されている。

云何以稱量行相。依正道理思惟諸蘊相應言教。謂依四道理無倒觀察。何等爲四。一觀待道理。二作用道理。三證成道理。四法爾道理。云何名爲觀待道理。謂略說有二種觀待。一升起觀待。二施設觀待。升起觀待者。謂由諸因諸緣勢力升起諸蘊。此蘊生起要當觀待諸因諸緣。施設觀待者謂由名身句身文身施設諸蘊。此蘊施設要當觀待名句文身。是名於蘊升起觀待施設觀待。即此升起觀待施設觀待。升起諸蘊施設諸蘊。說名道理瑜伽方便。是故說爲觀待道理。云何名爲作用道理。謂諸蘊生已由自緣故。有自作用各各差別。謂眼能見色耳能聞聲。鼻能嗅香舌能嘗味。身能覺觸意能了法。色爲眼境爲眼所行。乃至法爲意境爲意所行。或復所餘如是等類。於彼彼法別別作用當知亦爾。即此諸法各別作用。所有道理瑜伽方便。皆說名爲作用道理。云何名爲證成道理。謂一切蘊皆是無常。衆緣所生苦空無我。由三量故如實觀察。謂由至教量故由現量故。由比量故。由此三量證驗道理。諸有智者心正執受安置成立。謂一切蘊皆無常性衆緣生性。苦性空性。及無我性。如是等名證成道理。云何名爲法爾道理。謂何因緣故即彼諸蘊。如是種類。諸器世間。如是安布。何因緣故地堅爲相水濕爲相。火煖爲相風用輕動以爲其相。何因緣故諸蘊無常諸法無我涅槃寂靜。何因緣故色變壞相受領納相。想等了相行造作相。識了別相。由彼諸法本性應爾。自性應爾。法性應爾。即此法爾說名道理瑜伽方便。或卽如是或異如是或非如是。一切皆以法爾爲依。一切皆歸法爾道理。令心安住令心曉了。如是名爲法爾道理。如是名爲依四道理。觀察諸蘊相應言教。如由算數行相及稱量行相。觀察諸蘊相應言教。如是卽由二種行相。觀察其餘所有言教。如是總名審正觀察。思惟一切所說正法。如是名爲聞思正法。

『瑜伽師地論』卷二五（大正三〇・四一九中）

この四種の道理によつて、正しく觀察していくことが求められる。特に、證成道理は、「無常」「苦」「空」「無我」という仏教の真理を現量、比量、聖教量の三量によつて如実に觀察し、三量によつて道理を證驗するとある。法爾道理には、何の因縁の故に「諸蘊無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」なりやとあるから、ここにも法印が記されている。

その他、大隅氏が挙げた『瑜伽師地論』卷三〇には、数ヶ所に四種道理が記されている。

如何名爲尋思於理。謂正尋思四種道理。一觀待道理。二作用道理。三證成道理。四法爾道理。當知此中由觀待道理尋思世俗以爲世俗。尋思勝義以爲勝義。尋思因縁以爲因縁。由作用道理尋思諸法所有作用。謂如是如是法有如是如是作用。由證成道理尋思三量。一至教量。二比度量。三現證量。謂正尋思如是如是義。爲有至教不。爲現證可得不。爲應比度不。由法爾道理。於如實諸法成立法性。難思法性安住法性應生信解不應思議不應分別。如是名爲尋思於理。

『瑜伽師地論』卷三〇（大正三〇・四五一下—四五二上）

右記には、毘鉢舍那に関する箇所に記されており、道理を尋思することを解説しているが、瞑想と道理とが關係することが分かる。「道理を参究すること」が繋がつてこよう。

復審思擇。此中都無我及有情或求樂者或與樂者。唯有諸蘊唯有諸行。於中假想施言論。此求樂者。此與樂者。又彼諸行業煩惱等以爲因縁。如是名依觀待道理尋思慈愍。若於慈愍善修善習善多修習能斷瞋恚。如是名依作用道理尋思慈愍。如是之義有至教量。我内智見現轉可得。比度量法亦有可得。如是名依證成道理尋思慈愍。又即此法成立法性。難思法性安住法性。謂修慈愍能斷瞋恚。不應思議不應分別應生勝解。如是名依法爾道理尋思慈愍。是名勤修慈愍觀者。尋思六事差別所縁毘鉢舍那。

『瑜伽師地論』卷第三十（大正三〇・四五三下—四五四上）

右記には、四種道理によつて慈愍を尋思することが説かれている。

由此二因増上力故。便爲三苦之所隨逐。招集一切純大苦蘊。如是名依觀待道理。尋思縁起所有道理。復審思擇於是縁性縁起觀中。善修善習善多修習能斷愚癡。又審思擇如是道理有至教量有内現證有比度法。亦有成立法性等義。如是名依作用道理。證成道理。法爾道理。尋思縁起所有道理。是名勤修縁起觀者尋思六事差別所縁毘鉢舍那。

『瑜伽師地論』卷第三十一（大正三〇・四五四下）

右記には、縁起の所有る道理を尋思することが説かれている。

また、『大乘莊嚴經論』卷一二にも四種道理を示す箇所が見出される。

道理假建立四種者。偈曰

正思正見果 擇法現等量

亦說不思議 道理有四種

釋曰。道理假建立有四種。一相待道理。二因果道理。三成就道理。四法然道理。相待道理者。所謂正思。由待正思出世正見方始得起。離正思惟更無別方便故。因果道理者。所謂正見及果。成就道理者。所謂以現等量簡擇諸法。法然道理者。所謂不可思議處。此法已成故如。問何故正思能起正見。此已成就不應更思。何故正見能斷煩惱及得於滅。此已成就不可更思。諸如是義悉是法然道理。如此四種名道理假建立。

『大乘莊嚴經論』卷一二(大正三一・六五三中)

相待道理は、「正思」であり、これによって出世の正見が起る。因果道理は、正見及び果である。成就道理は、現量などの量によって諸法を簡括する。法然道理は、不可思議の処であるという。法爾(法然)道理から「神仏の加護」や「密教」などを生ずる根拠となるか。

- (48) 中村元訳『仏弟子の告白 尼僧の告白』一九八四年、岩波書店、二九頁。

Susukhumanipunāthadassina maṭṭhaleṇa nivātaṇṇa saṃseviṭabuddhaśīlā nibbāṇaṃ na hi tena dullaḥhaṇa ti. ||71|| "THERA and THERIGATH" (PTS, 1990, p. 11)。

- (49) 中村元訳『仏弟子の告白 尼僧の告白』一九八四年、岩波書店、六三頁。

susukhumanipunāthadassinaṃ maṭṭhaleṇa nivātaṇṇa saṃseviṭabuddhaśīlā nibbāṇaṃ na hi tena dullaḥhaṇa ti. ||210|| "THERA and THERIGATH" (PTS, 1990, p. 27)。

- (50) 中村元訳『仏弟子の告白 尼僧の告白』一九八四年、岩波書店、七九頁。

Yo dandhakāle tarati tarāṇiye ca dandhāye, ayoṇisoṇaṃ vīdhāneṇa bālo dukkaṃ nigaḥhati, //291// "THERA and THERIGATH" (PTS, 1990, p. 34)。

- (51) 小堀桂一郎「慈円が拓いた「道理の世紀」」(『文藝春秋』八七号、二〇〇九年六月、三二〇頁)。

- (52) 佐久間賢祐「論理・合理、禅理（二）——道元禅師の道理について」（『印度哲学仏教学』二三号、二〇〇八年、一五一頁）。禅に特有な表現として、道元、瑩山の著作における道理に関しては、「…底の道理」という表現が多く見出される。例えば、正2には「僧曰く、いかならんかこれ無処不周底の道理」、正3には「しばらくとふべし、作麼生ならんかこれ不干底道理、速道速道」とある。随3にも「如何是、不昧因果底の道理」、伝1にも「若し恁麼ならば、何を呼んでか、成道底の道理とせん」とある。中国の禅籍には「…底道理」が頻出する。特に『大慧普覺禪師語録』に多く見出すことが出来る。「…底道理」を参究功夫するのであるが、このような表現は慈円の著作には見出されない。
- (54) 中尾良信「解説」（『道元思想大系』1伝記篇第一巻——道元の生涯1——一九九五年、四三八頁）。
- (55) 大久保道舟氏は、次のように述べている。

乃ち通親の妻と基房の妻とが骨肉の姉妹であるとするれば、通親と基房とは正に義兄弟の関係であつたといわねばならぬ」大久保道舟「俗系の研究」（『道元思想大系』1伝記篇第一巻——道元の生涯1——一九九五年、同朋社、一七五—一七六頁）。
- (56) 拙稿「『正法眼蔵』の文体と思想の研究（覚書）」（一九九六年、『曹洞宗宗学研究所紀要』第一〇号）参照。
- (57) 拙稿「『弁道話』第十四問答の一考察——Xとのみしりて、Yとしらずの構文から——」（一九九六年、『宗学研究』第三八号）。
- (58) 小堀桂一郎「慈円が拓いた「道理の世紀」」（『文藝春秋』八七号、二〇〇九年六月、三二〇頁）。
- (59) 倉沢幸久「鎌倉時代の「道理」について——慈円・道元・無住——」（大阪大学文学部日本学研究室編『日本学報』第二号、昭和五八年）七六頁。
- (60) 道教では、強と弱、愚と智、有と無、陰と陽の織りなす自然の真理、自然の道理を「道」と呼び、「道」に適った生き方をすることが理想とされる。本覚思想は、
 - (1) 現実世界の相対的三元論を超越した、絶対的不二の徹底した肯定。
 - (2) 現実世界へもどり、相対的三元論の諸相の徹底した肯定。という構造をもつ思想（田村芳朗「道元と本学思想」（浅井圓道『本学思想の源流と展開』一九九八年、平楽寺書店、二七二頁所収）。多賀宗隼氏は次のように述べている。

和歌はわが国の世俗の遊び（俗諦）である。併しながらそれはまたそのまま観音の実語（真諦）である。それは二諦一如の理

によるのであり、従って歌を按ずることは二諦一如、真諦即俗諦の観に入ることである。

多賀宗隼『慈円』一九五九年、吉川弘文館、一三六頁。
この中の二諦一如の理というのは本覚思想に近いものを感じる。慈円は『小倉百人一首』に選ばれる程和歌の名人である。『愚管抄』のみならず和歌の方面からも考察したい。

(二〇一七年一月二二日太祖降誕会)